

平成19年度

中英研会報

第66号

東京都中学校英語教育研究会

平成19年度 行 動 目 標

東京都中学校英語教育研究会は、21世紀における中学校英語教育のなお一層の充実・発展を目指して活動することにその意義を有するものである。

よって、つぎのような行動目標のもと積極的にその活動を推進する。

1. 組織の充実とその活性化を積極的に図る。
 - (1) 都中英研の組織がより強固なものとなるようその充実を図り、改善を行う。
 - (2) 都中英研の各種事業により多くの教員や学校が参画することを通して、その活性化を積極的に図る。

2. 財政基盤の充実を積極的に図る。
 - (1) 従来の事業内容を見直し、経費の節減を積極的に図る。
 - (2) 新たな事業の展開を積極的に行い、収入源の確保を図る。
 - (3) 会費制の導入について積極的にその検討を行う。

3. 人材の育成を積極的に図る。
 - (1) 有能な人材を発掘し、リーダー層の育成を積極的に図るとともに、英語教員全体の資質向上を推進する。
 - (2) 教員の資質向上を目指した研修事業を積極的に企画し遂行する。

4. 調査・研究機関の充実を積極的に図る。
 - (1) 英語教育に関わる基礎的事項や活動実態についての調査活動を積極的に遂行する。
 - (2) 英語教育に関わる今日のかつ実践的な課題についての研究活動を積極的に遂行する。

5. 英語教育に関わる関係機関や関係団体との連携を積極的に図る。
 - (1) 「全英連中学部会」との関わりを一層深め、外部機関へ主体的に発信できる組織づくりを目指す。
 - (2) 文部科学省や東京都教育委員会との関わりをより充実させる。
 - (3) その他、英語教育に関わる関係諸団体との関わりをより充実させる。

6. 英語教育に関わる各種情報の収集ならびにその発信を積極的に図る。
 - (1) これまでの広報媒体を活用して、各種情報の発信を積極的に行う。
 - (2) H.P.の活用を図り、それを通して各種情報の受・発信を積極的に行う。

目 次

●この一年を振り返り	備里川正人	1
●学習指導要領の改訂を踏まえた今後の英語指導	岩崎紀美子	2
●外国語（英語）に関する研修について	君塚 佳昭	4
●小学校英語活動と中学校との連携（8）	太田美智彦	6
●実践研究		
(1) 東京都英語学芸大会 スピーキングの部優勝	澤田真樹子	8
(2) 東京都英語学芸会 劇の部優勝	青柳 有希	9
(3) “Supplementary readingを活用した教科書の読解”	紺野 正典	11
(4) 東京教師道場における2年間の研修の取り組み	柴野 泰行	13
(5) 東京教師道場における2年間の研修を通して学んだこと	小川 登子	15
(6) 小学校英語の実践	山田 仁	17
●各部報告		
・総務部報告	飯島 光正	21
・事業部報告（1）～（2）	横山 達也	22
・調査部報告	重松 靖	24
・研究部報告	北原 延晃	26
・プロジェクト・チーム部報告	安原 美代	26
・出版部報告	池田 武男	27
●研究大会報告		
・第47回 十五大都市公立中学校英語教育研究会連絡協議会（神戸大会）	田幸 徹	28
・第57回 全英連総会・全国英語教育研究大会（福島大会）	清水研一郎	29
・第31回 関東甲信地区中学校英語教育研究協議会（神奈川大会）	飯島 光正	30
●各地区活動状況		32
●中英研事業報告		48
●中英研会則		50
●役員一覧		52
●あとがき		58

『この1年を振り返り』

～更なる前進を求めて～

会 長 備里川 正人
(足立区立第十四中学校校長)

この1年を振り返ると、日本でも世界でもいろんな大きな事件・事故そして社会の関心事が起きた。

日本では「消えた年金問題」、「中越沖地震の発生」、「郵政民営化のスタート」や相次ぐ「食品偽装問題」があった。世界では「いまだに混迷する中東情勢」、「米サブプライムローン問題の拡散」もあれば「地球温暖化の問題」は世界規模でのかなり深刻な問題であり、これからも引き続き重要な問題となるはずである。

英語教育の面から振り返ると、学習指導要領の改革で、小学校での外国語活動の導入も考えられ、今までの中高連携の英語教育だけではだめで、それこそこれからは、小中高大までもにらむ大きな視点に立った連携をはからなければいけない。

都中英研は平成19年5月17日に総会を開き、新しい役員および部員とともに、それぞれの部を中心に多くの活動に取り組んだ。もちろん全英連、関プロそして政令都市との関係も大事にしている。

事業部の「サマーワークショップ」や「授業力アップ研修会」に対する人気は言うまでもないが、第60回英語学芸大会は、特筆すべき長い歴史と伝統を感じさせる節目のものとなった。研究部の「サマーワークショップ」も高い評価を得て、たくさんの参加者もある。また年度末の公開授業と研究発表はいつも期待されている。プロジェクトチームは、都英語教育の課題の中からテーマを設定し、授業改善の研究を進めている。調査部は、いつもの「コミュニケーションテスト」の実施だけでなく、これまでの調査部の財産を『コミュニケーション・テストへの挑戦』という形で本にまとめた。出版部は、「都中英研だより」や「都中英研会報」だけでなく、都中英研のホームページを重要な情報発信の手段として、これまでのものを一新し魅力あるものにした。総務部は裏方ではない。いつも前を見ている。総務部の視点がなければ、今のように都中英研は動かない。

都中英研は、これからも多くの人に支えられながら、更に前進しなければいけない。それだけ責任は重いが、やりがいもある。組織としてより努力を重ねたい。

学習指導要領の改訂を踏まえた今後の英語教育

東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課 指導主事 岩崎紀美子

「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（平成19年11月7日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）にもあるように、中学校の外国語科は、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力を養うことをねらいとしている。このねらいを実現するため、「言語活動」、「言語活動の取扱い」、「言語材料」等により内容を構成し、生徒の発達段階を踏まえ、具体的な言語活動を通して外国語の力を育成している。生徒の学習状況については、例えば、中学校においては「聞くこと」、「話すこと」に重点をおいた指導が行われており、全体として聞くことについては比較的良好である。しかし、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分に身に付いていない、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分に身に付いていない状況が見られることが課題である。今後は、社会や経済のグローバル化の急速な進展に伴い、単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成がより重要となってくる。以下、「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」を受けて今後の英語教育について述べてみたい。

1 改善の基本方針

- (1) 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また、コミュニケーションを内容的に充実したもののできるよう、指導すべき語数を充実する。
- (2) 中学校における「聞くこと」、「話すこと」という音声面での指導については、小学校段階での外国語活動（「仮称」以下省略）を通じて、音声面を中心としてコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地が育成されることを踏まえ、指導内容の改善を図る。あわせて、「読むこと」、「書くこと」の指導の充実を図ることにより、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、及び「書くこと」の四つの領域をバランスよく指導し、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を養う。

2 改善の具体的事項

- (1) 小学校段階での外国語活動を通じて育成された素地を踏まえ、「聞くこと」、「話すこと」に関して、簡単な話しかけに対して正しく応答したり、身の回りの出来事などについて、事実関係を伝え合ったり、自分の考えを述べ合ったりすることができるよう、指導の改善を図る。
- (2) 「読むこと」に関して、内容的にまとまりのある文章を読み、情報を整理して正確に読み取ったり、書き手の意図をとらえたりすることができるよう、指導の充実を図る。
- (3) 「書くこと」に関して、自分の考えや気持ちなどを読み手に正しく伝えられるよう、内容的にまとまりのある一貫した文章を書けるように、指導の充実を図る。
- (4) コミュニケーション能力を高めるため、言語の使用場面と言語の働き、言語材料を効果的に関連付けた言語活動を充実し、文法指導の改善を図るとともに、コミュニケーションにおける指導頻度の高い慣用表現や指導すべき語数を充実する方向で見直す。また、語彙や文構造を定着させ、実際に活用できるようにするために必要な指導の改善を図る。

3 小学校段階における外国語活動

- (1) 我が国においては、外国語教育は中学校から始まることとされており、現在、中学校においてあいさつ、自己紹介などの初歩的な外国語に初めて接することとなる。しかしこうした活動は、むしろ小学校段階での活動になじむものと考えられる。そのため、小学校段階で外国語に触れたり、体験したりする機会を提供することにより、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地を作ることが重要と考えられる。
- (2) 小学校段階における外国語活動の導入に当たっては、小学校と中学校が緊密に関連を図ることが重要である。例えば、中学校においては、小学校における外国語活動の内容や指導の実態等を十分に踏まえた上で、中学校における外国語教育への円滑な移行と、指導内容の一層の充実・改善を図ることが求められる。
さらに、中学校の学習指導要領の改訂を行うに当たり、小学校における外国語活動を通じて培われた一定の素地を踏まえて、中学校における外国語教育では、「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能のバランスのとれた育成がなされるよう見直しを図る必要がある。

東京都教職員研修センターにおける 外国語（英語）に関する研修について

東京都教職員研修センター 統括指導主事 宮野 聡 坂本 純一
指導主事 君塚 佳昭

平成19年度は、外国語（英語）に関する選択課題研修（自己の課題に応じて選択できる研修）を下記のとおり実施し、多くの先生方が受講されました。

<選択課題研修 英語Ⅰ>

「英語指導の基礎・基本」

○ねらい…学習指導要領の理解や学習指導案の作成や授業研究等を通して、授業づくりに必要な知識や技能を習得する。（全3回）

①「学習指導要領の内容と基礎的な授業展開の理解」

研修会場 東京都教職員研修センター

講師 武蔵野大学客員教授 長 勝彦

②「学習指導案の作成と指導事例等の理解」

研修会場 東京都教職員研修センター

講師 公立中学校教諭

都立高等学校教諭

③「授業を基にした授業展開・指導方法等の理解」

研修会場 府中市立府中第二中学校

講師 府中市立府中第二中学校教諭

<選択課題研修 英語ⅡA>

「実践的コミュニケーション能力を高める指導の充実」

○ねらい…実践的コミュニケーション能力を高める指導の理解と授業研究等を通して、授業力の向上を図る。（全2回）

①「実践的コミュニケーション能力を高める指導の実際」

研修会場 東京都教職員研修センター

講師 公立中学校長

②「授業を基にした指導と評価の改善」

研修会場 江東区立東陽中学校

講師 江東区立東陽中学校教諭

<選択課題研修 英語ⅡB>

「表現力や理解力を高める指導の充実」

○ねらい…発達段階に応じた聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの高める指導の理解を通して、授業力の向上を図る。（全2回）

①聞くこと・話すこと的能力を高める言語活動の実際

研修会場 東京都教職員研修センター

講師 財団法人津田塾会派遣講師 3名

②読むこと・書くこと的能力を高める言語活動の実際

研修会場 東京都教職員研修センター

講師 財団法人津田塾会派遣講師 3名

<選択課題研修 英語Ⅲ>

「英語指導に関する専門性の向上」

○ねらい…これからの英語教育についての理解を深め、教材開発を通して、各地域における教科指導の指導者として必要な資質・能力を高める。(全3回)

①「発達段階に応じた指導とこれからの英語教育の在り方」

研修会場 上智大学四谷キャンパス

講師 上智大学教授

吉田 研作

②「指導の改善と教材開発」

研修会場 上智大学四谷キャンパス

講師 上智大学教授

渡部 良典

③「授業を通じた授業改善への取組み」

研修会場 都立千早高等学校

講師 都立千早高等学校教諭

このほかに、以下の外国語（英語）に関する研修を実施しました。

<英語教員集中研修>（必修研修 夏期休業日5日間）

○ねらい…「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想－英語力・国語力増進プラン」（文部科学省）に基づき、英語教員の英語運用能力及び英語指導技術等の向上を通して、生徒の実践的コミュニケーション能力を高め、授業改善を図る。

<進学対策のための教科研修>

○ねらい…進学対策における予備校の指導方法等の理解を深め、全受講者による模擬授業や受講者代表による授業研究を通して授業改善を図ることで、都立高等学校の進学指導の向上に資する。

<中高一貫教育校教員養成研修>

○ねらい…中高一貫教育の趣旨や教養教育、6年間を見通した学習指導等について理解を深めるとともに、中高一貫教育校における教育課程の編成と教科指導の実践力を身に付ける。

<東京教師道場>

○ねらい…東京都公立学校の児童・生徒の学力向上を図るため、教員の「授業力」を一層高めるとともに、他の教員を指導する資質・能力を育成する。

小学校と中学校との英語教育の連携（8）

－今後の小学校英語活動と小・中連携のあり方－

元中英研会長 太田 美智彦

文部科学省は本年3月末までに、小・中学校の新学習指導要領を告示する予定であるが、それに先立って昨年の平成19年11月7日に、中教審初等中等教育分科会教育課程部会は、これまでの審議のまとめを公表した。その中で、小学校段階における外国語活動（「仮称」以下小学校英語活動）が、中・高等学校におけるコミュニケーション能力育成のための素地づくりとして大切で、英語活動の導入に当たっては、小学校と中学校とが緊密に連携を図ることが重要であると述べた。以下今後の小学校英語活動の方向と小・中連携のあり方について考えてみたい。

1. 国際コミュニケーションの素地づくりとしての小学校英語活動

いよいよ全国の公立小学校で英語活動が実施されることになった。その主なねらいは、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成や「広く言語や文化に対する理解」を深めることである。言語スキルの習得を重視することではない。その内容は、身近な場面やそれに適した言語や文化に関するテーマを設定し、その場面やテーマに応じた基本的な単語や表現を用いて、音声面を中心とした活動を行い、言語や文化について理解させることを基本としている。

教育課程上の位置付け等については、教科としてではなく、新たな領域として位置付けられるであろう。また、時間数は、高学年（5、6学年）においてそれぞれ週1コマ年間35時間実施される。指導者に関しては、当面は、学級担任を中心に、ALTや英語が堪能な地域人材等とのチーム・ティーチングが基本となる。更に、教材・教具等の教育条件の整備の重要性から、国として平成20年度にはCD付きの「英語ノート」を児童に配布する計画のようである。

2. 小学校英語活動と中学校英語教育との連携のあり方

最近、9年間の連続性のある教育を行うねらいで、品川区を初めとして小中一貫教育校が増えてきた。その一環として外国語教育における小中連携の取り組みの発表会が、今年に入っていくつかの学校で行われる。まず大切なことは、中学校の教師が小学校英語活動の理念や実態を授業観察や実際に授業に参加して理解することである。このことの詳細は、17年度と18年度の拙稿をみていただきたい。ここでは、特に以下の2点について述べたい。

（1）小学校英語活動に関する指導内容（試案）と中学校との接続について

日本教育新聞（平成19年9月10日付）は、小学校英語活動のための指導内容（試案）の一部をイメージとして掲載した。これは第39回教育課程部会の議事録に基づいていると思われる。その一部を取上げてみる。

<言語の使用場面・言語の働き/扱う題材→表現例>

- ・挨拶・挨拶をする、挨拶の動作／世界の様々な挨拶→Hello. Bon jour.等
- ・自己紹介・好みを伝える／自己紹介の仕方→My name is… I like apples.
- ・日常生活・事実を尋ねる／いろいろなものの名前(英語／日本語)→What's this? It's..
- ・買い物・好みを伝える／日本と世界の服装→I like red.
- ・日常生活・気持ちを伝える、身振り手振りで伝える／様々なジェスチャー→I'm happy.
- ・道案内・相手に正しく伝える／道案内の仕方→Where is the flower shop? Turn right.

これを見ると、現行中学校学習指導要領の〔言語の使用場面の例〕と〔言語の働きの例〕を踏まえているようであるが、これは、また多くの小学校の実践に基づいていると言える。この指導内容に小・中共通の部分が見られることから、中学校区のグループの中で、小学校と中学校とが同一テーマで発達段階にそった指導案で授業を見せ合い、活動内容のスムーズな接続を図っていくことは重要なことである。

(2) 言語や文化を理解させることの小・中での共通理解

教課審は、コミュニケーション活動を通して国際感覚を培う視点から、言語や文化を理解させることを基本とした。英語活動を通して日本語の特徴や自国や外国の文化に気付かせていくことについて、小学校での活動から、1、2例をあげてみたい。

「例1」日本語の特徴についての関心を高める

日常、授業や廊下等で教師と児童が挨拶を交わす。「先生、お早うございます。」
“Good morning, Mrs. Ito.” 「おはよう。由美は元気だね」 “Good morning, You're fine, Yumi.” この簡単な言葉のやりとりの中にも、名前を大切にしている英語文化がみられ、固有名詞が二人称の代わりに使われて「あなた」がその時の人間関係で省略される日本語の特徴に関心をもたせる。

「例2」 「ジャンケンポン」を通して日英文化の理解を深める

よくゲームを始めるときに、Rock-paper-scissors、one, two, three.と言って先攻か後攻かを決める。この活動を通して子どもたちは多くのことを学ぶ。「日本ではジャンケンポンで決めるけれど、欧米ではコインをあげて決める。ジャンケンは相手がいないと絶対にできないが、コイン・トスは一人でもできる。ジャンケンのルールでは、相手が何をだすかによって意味が現れる。また、相手の出方を見ながらジャンケンをするので、手もコミュニケーションの大きな役割を果たす」など、児童は気付く。ジャンケンの奥底にあるものは、相互的な関係で人間をとらえようとしていることであり、コイン・トスは、個が単位でそれが基本的な考え方であることを話すと、子どもは面白そうに聞いている。英語でコミュニケーション活動をしながらか、その背後にある文化に関心をもたせていくことも、国際理解教育の一環としての英語活動であると思う。中学校の教科書も様々な潜在文化の宝庫でもあることを理解し、活用していきたい。

共に闘うことから学んだ “Never Give Up !”

荒川区立尾久八幡中学校 教諭 澤田 真樹子

数名から構成される英語部のメンバーの中から、区の英語生徒発表会への代表を選出する流れで行ってきたので、今年度も部長の中谷君が出場することは暗黙の了解で決まっていた。区のコンテストでは、一年時はスキットで優勝できたのだが、二年次は暗唱で二位。学校内の学芸発表会の寸劇の練習に時間をとられ、十分な暗唱の練習の時間を作れなかったためにくやしい思いが残った。

さて、いよいよ三年、同じ思いはさせられないと強く思った。15歳の少年の気持ちを素直にそして力強く表現できる題材が彼の学校生活の中にあった。スポーツ少年の彼が三年間継続して取り組んできたことは連合陸上大会への参加であった。並々ならぬ意欲と、闘志を見せてきた。走り幅跳びの選手として、一年時はすんなりと代表になって六位に入賞。ところが二年時、最後にライバルに敗れ、選手係として仲間を支える。その時の思いが、今回のスピーチのタイトル、「Never Give Up !」につながった。「ヨーシ、来年こそ代表になる！お前ならできる！絶対にできる！」と自分に言い聞かせ、学校生活の全ての事に真剣にひたむきに取り組む姿があった。

一回りたくましくなった姿で、三年時には代表として選出され、自分のため、今日まで共に闘ってきた友のため、そして学校のために全力で、できるだけ遠くに跳んだ。結果、第一位！勝った嬉しさだけではなく、全身全霊で努力してきた彼自身のがんばりに自負と充実感がみなぎり、この三年間でひとつの行事を通してたくましく成長してきた少年の健気な姿があり、大切な事は何なのか、自分で体験し、体感できた。

荒川区の連合体育大会が九月に開催され、それまでの彼の気持ちの動き、行動の変化を目の当たりにしてきた私にとって、その内容をスピーチとして、日々成長していく彼の様子を生き生きと表現できたことは何よりも喜ばしいことであった。自分が夢中になってがんばってきた軌跡だからこそ、自然に少年らしく表現できたと思う。友と共に闘う辛さと喜びを学びつつ、三年時には、少年の心が広がりを見せていく、まさに、

「growing up」である。リズム感の良さや表現力の豊かさは天性の物であろうと思われるが、彼自身が中学校生活の中で力を入れてきた行事への取り組みを都中学校英語学芸大会においてスピーチさせていただけたことは本当に有り難い光栄であった。本番当日、全ての人への感謝の気持ちを抱きながら、等身大の自分を表現するたくましさに感動を覚えた。彼の姿から、沢山の思いを学ばせていただいた。

私たちのAS IT IS IN HEAVEN ～ 歓びを歌にのせて～

東京学芸大学附属小金井中学校 教諭 青柳 有希

2006年、1月。私は衝撃を受けた。これほどまで胸をえぐられた歌が今までにあったらうか。瀕死のダニエルがガブリエラのために作曲した「ガブリエラの歌」。これはスウェーデン映画「歓びを歌にのせて」の主題歌である。この歌に込められたメッセージによって、悲劇としか思えないエンディングはその逆であることが分かる。大切なメッセージ“I want to feel that I'm living my own life”を、英語劇を通して伝えたい。そして、何よりもこの素晴らしい歌をエンディングで生徒たちと歌いたい。次年度の英語劇はこの作品にしようと私は決意した。

週に2時間の「3年選択」では、ミュージカルスタイルの「英語劇」を毎年創作している。それは、歌うことが大好きな生徒たちがこの授業を選択し、「歌は生きているセリフである」とみなしているからだ。授業の一環ということで、次の3つの留意点を設けて8年になる。(1)全員が演技者でありセリフはおよそ同量である。(2)小道具や衣装は必要最低限とし、舞台上の人間だけにそのドラマ性が焦点化される劇を目指す。(3)音響や照明は分担制にする。つまり、生徒全員の舞台での登場時間と歌っている時間が長いということが特徴である。また、仲間と切磋琢磨していく中で表現することの大切さを学んで欲しいと願い、ゴールを4回設けた。11月の学芸発表会と北多摩地区予選、12月の都大会、そして2006年度から参加している3月の附属学校カーニバルである。そのゴールを目指し、毎年新しいメンバーと新しい脚本で臨んでいる。

2006年6月。英語劇の授業は、楽譜の配布と先輩たちの英語劇ビデオを鑑賞しての「英語劇において大切なことは何か」というガイダンスで幕を開けた。7月には日本語脚本を用いたオーディションで配役を決定し、英語脚本の読み合わせ。9月になると立ち稽古を開始。この作品は、村人たちの音楽(人生)に対する“I want to find my own sound!”から“We want to find our own sounds!”に至るまでの「友情」がメインテーマでありながら、「いじめ」や「DV」などの要素も複雑に絡んでくる。生徒たちはそれぞれに問題を抱えた「大人」を試行錯誤しながら演じ始めた。

心臓病の悪化のため生まれ故郷で療養中の世界的な指揮者ダニエル。ダニエルを見守るマネージャー。オープニングとエンディングで“Daniel, are you happy now?”と問いかける優しかった亡き母。コーラス隊で長年いじめる側のアーネといじめられる側のエリック。美しい歌声のガブリエラと暴力夫のコニー。保守派の牧師と新しい自分を改革したい妻フローレンス。歌の本質を教えて欲しいとダニエルに懇願するレナ。そして、それぞれに特徴を持つコーラス隊の村人たち。25人のそれぞれのキャラクターや人間関係を浮き彫りにするために、演出では様々な手法を凝らした。また、生徒たちは

毎日昼休みに集まって「ガブリエラの歌」を教育工学室で歌い、仲間との友情をますます深めていった。しかし、残念ながら2006年度の生徒たちは都大会の舞台に立つことはできなかった。ところが、彼らは卒業後も3月のカーニバルの舞台で渾身の演技を見せ、それは歌声とともに2007年度の英語劇生徒に鮮烈に映った。

2007年6月。2006年度とは脚本と演出を全く変えて2007年度の23人の生徒と新しいAS IT IS IN HEAVENに取りかかった。一人ひとりのキャラクターに合わせてセリフを（遠くまで母音の語尾が届くように単語やフレーズを）毎時間即興的に変えたり、アクセントやリズムの面では大切な単語を強くそして長く、単音節語はゆっくりはっきり発音させたりするのに心がけた。また、「ガブリエラの歌」の1番のみをスウェーデン語で歌うことにしてスウェーデン語の発音練習にも時間をかけるなど、メッセージがより観客に伝わるよう試みた。耐震工事のために、9月と10月の選択の時間が皆無になってしまったという逆境をバネに、生徒たちは昼休みのわずかな時間に歌と演技の練習を積み重ねていった。

北多摩地区予選に提出するための10月のビデオ撮影日。英語劇のOB・OGがたくさん応援に駆けつけてくれた。リハーサル後に先輩たちは、「感情を込めるということはどういうことか」などを具体的にアドバイスしてくれた。今年の生徒たちは大喜びで先輩からの言葉を頷きながら聞いていた。2006年度の生徒が「自分たちのAS IT IS IN HEAVENも良かったけれど、今年も違った面でよくできていると思うよ！」と言ってくれたことも、だいぶ励みになったようだ。予選落ちしようが優勝できようが、生徒たちの作品と歌に懸けた思いや、創造する過程で得た貴重な体験、そしてそこから生まれた仲間や先輩との絆に変わりはない。今年の生徒たちも未だに昼休みに集まって「ガブリエラの歌」を歌っている。聞くところによると、彼らにとってこの作品は、「都大会で優勝させていただいたのだから3月22日（カーニバル）までにまだまだ良くなる作品」らしい。英語劇を通した生徒一人ひとりの著しい変容—英語や他教科、そして日常のあらゆる面へのトランスファー—には目を見張るばかりである。そしてそれを目の当たりにした時もまさに、AS IT IS IN HEAVENだと思う。

最後に。いつも応援してくれる英語劇OB・OGの皆さん、編曲の浅田さん、指揮指導の養祖君、ダンス指導の鴨志田さん、最終チェックの福正君、発音指導の馬場先生、ネイティブの友人たち、保護者の皆様、同僚の先生方。そして、北多摩地区の審査員の先生方、都中英研の先生方、宝仙中・高校の先生方、この大会を支えて下さった皆様に心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

“Supplementary readingを活用した教科書の読解”

～教科書の題材をさらに興味付け、発展させる工夫 Outputを見据えたInput～

足立区立第六中学校 教諭 紺野 正典

1. 研究の目的

“外国語を学ぶには？”何を覚えるのか「覚えなければいけないのは、たったの2つ。___と___。」ここに入る言葉は何でしょう。かの有名な言語学者、千野栄一（1985）は“語彙と文法”だと言っている。三人称単数のsは、生徒にとってはなかなか身につかない文法の1つだが、コミュニケーションでは“tired”という語を知っていた方が、役立つ。だが、“He tired.”という英文を、われわれはよく目にする。やはり、この2つが語学の両軸である。千野は、外国語学習には、とにかく“まず千の単語を覚える”ことが大事だと力説している。

とは言え、今の週3回の英語授業では、語彙の定着はなかなか厳しいものがある。せっかく週末に覚えても、次週には忘れてしまうこともよくある。何度も何度も同じ単語を、違った場面で、繰り返して使うことで定着を図りたいものである。

日本の英語学習で一番足りない4技能は何であろうか。“Speaking”であろうか？“Writing”であろうか？私は自分の経験からも“Reading”だと思っている。

日本と韓国と中国と英語力の差をTOEFL試験において比較したデータを最近、われわれ英語教師が見ることもあるが、日本の英語学習者の習得速度が、他国の学習者よりも劣ることを示したデータも見あたらない（羽藤 2005）。そう考えると、今与えられた週3回の英語授業の中で、いかに英語に触れさせるかという量の問題、さらには教科書をいかにうまく教師が料理し、うまく生徒に興味付けするかも見逃せない。これらも教師の“腕の見せ所”なのである。私は常々、Outputを見据えたInputが重要だと認識している。

2. 教科書の題材を生かす

今使っているNew Crownの教科書は、幸いにもバラエティに富んだ国々を扱っている。2年生Lesson6で出てくる“Ratna talks about India.”では、他言語社会とインド文化について触れているが、たったの3ページではもったいない。そこで私は『新英語教育』で扱っている「教科書の中の国々」というページをSupplementary readingとして扱い、さらに深くインドを知る手がかりとした。

教科書Section 2 (P.53)

Namaste / This means ‘hello’ and ‘goodbye’ in Hindi. ～中略～ If you have any questions, please ask me.

インド出身のラトナが、自国では3カ国語をどんな時に使うかを話している。そして最後に、“If you have any questions, please ask me.”と言っているが、これだけの

InputではOutputにつながりにくいと見え、私は前述の「教科書の中の国々」を教科書の内容を補足するようアレンジした。(下線には、日本語をつけた)

Q. 1 インドではたくさん言葉が話されていると聞きますが、何カ国語あるのでしょうか。

There are 17 major languages and 844 dialects. The Indian national language is Hindi and its official language is English.

Q. 2 州によって教育制度が違うということは、使う言葉も違うのですか。またミシュラ先生は、何カ国語を話すのですか。 ～略～。

Q. 3 州によって学校が始まる時間も違うのですか。

Yes. Usually / school starts / at about ten and ends / at about four o'clock.

Q. 4 始まりはそんなに遅いのですか。では給食 (school lunch) はありますか。それともお弁当 (a box lunch) ですか? ～略～

Supplementary readingでは、単語をリサイクル出来るよう、また長文を初めからチャンクで切ってわかりやすさを心がけ、全部で151語を補った。これらの読解を私はペア学習で行い、相手に書かれた内容を伝えさせた。これだけの英文を読んだあとは、生徒からOutputとしての質問文がたくさん出てきた。教科書の内容を手助けするようにしたことで、教科書読解にも役立ち、思っていた以上に質問が出て、さらに教科書の内容が深まった。

3. まとめ 語彙増強のために中学3年間で出てくる語彙量

教科書3年間で出てくる総語彙を、ワードなどに並びかえてその全語数を数えたことがあるだろうか。教科書によって生徒に与えている語彙は全体で約8千語だ。これを市販のペーパーバッグに換算すると約20ページである(『現代英語教育』)。教科書が違ってほとんど変わらないだろう。われわれ英語教師が探求すべきは、3年間という長いビジョンでつけさせたい力を描き、それをバックワードデザインでたどること。そして、週3時間の中でいかに無駄をなくし、生徒が1時間で触れる英語の分量を増やしていくことではないだろうか。もちろん、語学を学ぶには、4技能のバランスがとても必要だ、とEllisも言っている。

参考文献

Ellis, R. (1993). "Talking Shop Second Language Acquisition Research"

ELT Journal. 43/1 January, Oxford: Oxford University Press. pp3-11

「英語教育なんでも探偵団②」『現代英語教育』第33巻2号研究社 1996年5月

「教科書の中の国々」『新英語教育』三友社 1998年1月

千野栄一『外国語上達法』岩波新書 1985年

羽藤由美『英語を学ぶ人・教える人のために』世界思想社 2006年

東京都教職員研修センター

「東京教師道場」における2年間の研修の取り組み

18道場 中学校外国語（英語）第1班・第2班

助言者 昭島市立瑞雲中学校

相沢 秀和

部 員 足立区立興本扇学園扇中学校

柴野 泰行

「道場」2年間の取り組みと成果

私たち18道場第2班の2年間の授業研究は、涙でスタートした。平成18年4月から新たな研修として始まった東京教師道場、6月の部員による最初の授業公開後の協議会でのことである。多くの指摘、思い通りの授業が展開できない悔しさ、もっと良い授業がしたいという思いが複雑に入り組み、授業者の涙となって表れたのだ。これから2年間の厳しい鍛練を予感させる幕開けとなった。

東京教師道場は、8人の部員と2名の助言者が1つの班を組み、月1回のペースでお互いの授業を公開し、全員が参観した後、協議を行う。その協議会は一般的なものと異なり、うわべだけの意見は御法度である。授業の良いところのみならず、足りないところ、不要なところが指摘される。自分の授業が丸裸にされ、検証される。指摘する側の部員も自分が発言するたびに自問自答を余儀なくされる、「では、自分の授業はどうなのだ」と。何が足りないのか、何が必要なのか、どうすべきなのかがお互いに見えてくる。同時に、自分の発想でやり始めた指導法に論理的な裏付けがあることを知って自信を得たり、授業で何げなくやっていたことが自分独自のオリジナリティーであり授業に特色をもたせる効果があると知ったりもする場面もある。切磋琢磨、お互いを鍛えるために全力でぶつかり合う稽古、まさに教師の授業力を高める道場なのだ。

部員が学ぶのは、指導方法や技術ばかりではない。協議会後の交流会では、助言者や部員が集い、語り合うことにより、お互いの個性、人柄とともに、教師にとって大切な情熱や人間性を学び取る。

この2年間での部員の成長はめざましい。指導法の改善、指導技術の向上はもちろんである。授業に対する情熱や生徒への思いはふくらみ、自信が芽生えてきている。前出の涙の教諭は、愛と熱意の指導で徐々に生徒たちの英語力をつけていったという授業実践を公開するに至った。どういう指導をすれば、どういう成果が期待できるのかが見えてきた。これからは、研修で得たことを実践しながら、その成果を実証する段階に入る。この2年間という研修は確かに長期であるが、それで完結するわけではない。この2年間が大きなエネルギーとなり、さらにより良い授業を目指してそれぞれが自分を磨き高めていくことだろう。

(昭島市立瑞雲中学校 教諭 相沢 秀和)

この研修は、2年間3期の研修であった。

第1・2期は授業の手順と各活動の目的について、部員の研究授業後の協議会で意見を出し合った。具体的には、①授業内の各取り組みにつながり（団子の串と呼ばれていた）があるか、②指導の手順や方法は生徒にとってわかりやすいものか、③授業内の各活動がどのような長期的な視点（目標）に立って行われているのか、などが問われた。この研修を通じて、教材研究や指導計画に対する理解と知識が深まった。学び得たことを授業で実践できるようになるには、今後の自己研鑽によるところが大きい。

第3期は、第1・2期で、批評的に授業を見て、協議し合ってきたことを、今度は助言者の立場から、わかりやすく授業者に説明できる実践研修を行った。特に、ほぼ即興で代案を発表できる能力が求められた。そのあと、その助言活動が適切で、わかりやすいものであったかどうかについて、授業者そして助言者の先生方の意見を聞き、研修を行った。即興で自分の意見や考えを発表するには、自分の授業スタイルと授業内容が確立しており、日頃から生徒の反応を観察し、よく考え、工夫しながら授業に取り組んでいるかが問われる。私には、とてもつらい研修期間であった。

今振り返ってみると、とても厳しい研修であった。しかし、部員全員が、自分の指導力を高め、生徒と充実した授業を創っていきたいと強い意欲をもって臨んでいたため、とても充実した時間を過ごすことができた。この研修で学び得たことを、今後の授業に100%生かしていくことが、私たち部員の大きな課題となる。これからが、また新たなスタートである。

改めて、東京都教職員研修センターの先生方や助言者の先生方、そして、各教育委員会・所属校の先生方には、本当にお世話になりました。本当にありがとうございました。

(足立区立興本扇学園扇中学校 柴野 泰行)

平成18年度 東京教師道場 中学校外国語（第1期生）

1班 [助言者]	田口 徹	本多 敏幸			
[部員]	大田 洋子	高瀬ひとみ	太田 真文	伊地知可奈	
	山田 仁	兼子 真希	柴野 泰行	斎藤 基	
2班 [助言者]	北原 延晃	相沢 秀和			
[部員]	鈴木 悟	小川 登子	上尾栄美子	川崎 慶介	
	谷村 亜紀	田中 清美	前田 宏美	江濱 悦子	

[指導主事] 君塚 佳昭 [学習指導専門員] 福田由美子 山本 展子

平成18年度「東京教師道場」

東京教師道場における2年間の研修を通して学んだこと

～授業が変われば、生徒が変わる～

葛飾区立葛美中学校 教諭 小川 登子

1. はじめに

東京教師道場を通して、尊敬する助言者の北原延晃先生と相沢秀和先生、相互研鑽を積むことができた仲間との出会いがなければ、今の自分はなかったと言っても過言ではない。この2年間で、私は確かに変わることができた。そして、自分が変われば、授業が変わり、生徒が変わることを、今改めて実感している。これまでの自分の2年間の振り返り、述べてみたい。

2. 第1期（1年次4月～8月）

平成18年6月6日、私は東京教師道場第1回目の研究授業をさせて頂いた。この日が、自分にとって一生忘れられない日であり、自分を変える出発点となった。追い詰められるまでに自己の課題の壁を前にし、愕然とし、どん底に落とされた。その日から、私は変わった。自己の課題と正面から向き合い、改善に取り組む日々が始まった。

3. 第2期（1年次9月～2年次6月）

11月に2回目の研究授業を行った。この日の授業は、1回目の授業からどれだけ進歩しているかが評価される、自分との勝負を意味した。助言者の先生方が意図される真意にたどり着けず、自問自答を繰り返して、授業を構築する上で大切なある一つの要素が見えてきた。自分が変わり、生徒が変わった。授業を構築するということがわかり始めた一歩となった。

道場2年目の平成19年4月、葛飾区立葛美中学校に異動した。自身の授業力にまだ課題を抱えている自分が、この学校にどれだけ貢献できるのか、不安がなかったわけではない。しかし、教師道場で学んだ一年間があったからこそ、どれだけ生徒を変えていけるか、授業を変えていけるか、2度目の勝負のときだと考えた。

生徒と出会って最初に感じたことは、語い力・発話力ともに不十分で、英語学習に対する苦手意識を強く持っていたことである。新しい活動を一度に取り入れると混乱が予想されるため、帯学習を含む全ての活動に段階を踏まえながら取り入れていった。

5月、研修2年次第1回の授業研究を行い、生徒と出会って1ヵ月後の姿を見てもらった。授業規律を立て直すことに精一杯で、自己の指導技術に目を向ける余裕が持てず、前回の授業から技術の進歩が見られないという課題を残したが、授業を成立させるための、「その土台を作る指導」を見直すことができた。

4. 第3期（2年次7月から3月まで）

10月、区の研修会で、研究授業をさせて頂いた。このときの私は、授業の達人と呼ばれる先生方の授業を見すぎて、優秀な指導法を、理想を追い求めるかのように、自分の

生徒にそのまま実践していた。生徒の反応に上手く対応し、切り替え、引き出していくテクニックが未熟であることを痛感した。しかし、そうした技術こそ、生徒と正面から向き合った授業作りには欠かせないことを学んだ。目の前の生徒に即した授業をすることの意味を、改めて考えさせられた授業となり、よい経験をさせて頂いた。

5. 最後に

東京教師道場という公的な機会を頂いたお蔭で、私は2年前の自分と比べて、確実に成長することができた。英語教師として、授業に集中して向き合うことのできた貴重な2年間であった。常に厳しいご指導とご助言を下された助言者の北原延晃先生と相沢秀和先生に、心より深く御礼を申し上げたい。そして、2年前の自分と同じ悩みを持っている方、自分を変えたいと思っている方がいれば、是非、教師道場での修業をお勧めしたい。

尊敬する多くの師と出会えたこと、よき仲間と研鑽を積むことができたことは、私の宝物である。自分の人生観を変えてくれたもの—それが、私にとっての東京教師道場である。2年間の研修期間が終わっても、自己の課題と向き合って、努力を続けていく気持ちは少しも変わらない。

～私の日常の授業実践～

(1) 授業規律の徹底とルールの確立

- ①始業3分前には教室に行く。
- ②チャイムと同時に号令をかけて始める。
- ③ダラダラした起立はやり直しさせる。
- ④服装の乱れや好ましくない姿勢は、その場で直させる。
- ⑤活動後と終わりの挨拶時に机を整列させる。
- ⑥生徒が下校後、教室を点検し、翌日に向けて環境を整える。

(2) 指導技術

- ①授業はできるかぎり英語で行う。
- ②英語の歌をたくさん聞かせる。
- ③活動のときの約束事を守らせ、集中して取り組む姿勢を身につけさせる。
- ④活動の裏には力を伸ばす仕掛けがあることを、生徒に納得させて取り組ませる。
- ⑤忘れ物をさせない工夫をする。(食べかけのおやつ作戦)
- ⑥提出物には必ずメッセージを添えて、たくさん褒める。
- ⑦発表活動は、ステップを踏ませてチャレンジさせる。
- ⑧ゴールと評価基準を明確にし、どの子も努力をすれば到達できるという、意欲を高める工夫をする。
- ⑨達成感を持たせる工夫を積み重ねる：普段の学習の積み重ねが反映され、結果が見えるから頑張れるテストへと変えた。
- ⑩教科書を立体的に発展させる活動。

(3) 授業内と授業外の2本立てで、学習の量を増やす工夫。

- ①授業内：帯学習、英語の歌、ペア学習による語い力の増強。ピクチャーカードを使ったOral Introductionや文型練習。flash cardsを使った新出語いの提示と練習。教科書の音読による基盤作り。Teacher Talkの工夫。
- ②授業外：家庭学習とリンクさせたノート指導・ライティングノート(書く量を増やす)エッセイノート・テストノート・スパイラルワークシート(既習事項の反復練習)

小学校英語の実践

品川区立城南小学校 山田 仁

1. これまでの課題

- (1) ゲームや歌など、単に楽しく活動していればいいのか？
→実践的コミュニケーション能力の育成を図るための活動になっていない。
場当たりの授業となっている。
- (2) 教材等の整備状況に大きな差が見られる。
- (3) 中学校に入学する段階で、英語に対する興味・関心やコミュニケーション能力に差が見られる。
- (4) 小学校では、ALTに頼ってしまい、学校や教師によって英語活動の取り組みに温度差が生じている。



品川区では、小学校の「英語活動」と中学校の「外国語」をつなぐため、9年間を「4-3-2」のまとまりで、「英語科」としてカリキュラムを編成する。

○授業は英語で行う。

○第1学年～第6学年の英語活動では、ALTや英語指導経験者等が指導にかかわる。

○第7学年～第9学年は、ALTが参加する授業を積極的に行う。

○日常生活にもALTを参加させ、できるだけ児童・生徒と触れる機会を積極的にもつ。

【1学年～第4学年】

英語によるコミュニケーションに「親しむ」

【第5学年～第7学年】

英語によるコミュニケーション能力を「身に付ける」

【第8学年・第9学年】

英語によるコミュニケーション能力を「活用する」

※第1学年～第6学年は、主に「聞くこと」「話すこと」の基礎的言語活動を行う。

2. 「読ませず」「書かせず」「訳させず」

自分が英語の授業をする際、「読ませず」「書かせず」「訳させず」を基本としている。つまり口頭コミュニケーションを重視している。なぜか。

私たちは、話すとき、文法をいちいち意識して話さない。それは、文法を習って我が

母国語をものにしたのではないからだ。親や家族や周辺の人が文法を教えた訳ではなく、ただ無意識に話しかけ（パターン入力）、発話するようになった時、それを促しただけ（出力の入力）である。脳は、自分で発話して我が声を自分で聞き、周辺から聞こえることばと擦り合わせて自分で修正し誤差を埋めていく。英語でも同じことがいえるのである。

また、私たちが言葉を獲得するとき、いきなり文字を使用することはないはずである。まずは、口頭コミュニケーションを行い、そして文字を覚えていくはずだ。

実際に英語を聴かせる、声に出して真似させる、声に出して話させる、そして実際に状況の中で会話問答のやりとりをさせる、ゲームで定着させるという一定の実践的な英会話やりとりのプラクティスを積み上げたのち、「いつのまにか話せるようになる」ものである。自転車が乗れるようになるためには、自転車に乗りながら身につけなければならない。泳げるようになるためには、泳ぎながら身につけなければならない、といったものと同様の能力獲得をたどっている。

小学校の時代の子どもは総体として体があまり大きくなならない。身体的成長がゆっくりしているのは、脳の神経回路形成に力を注ぐようにできているからだという。ことばや基本のスキルや能力の神経回路形成にエネルギーを注げば、かなりの程度習熟する発達力が小学校期には備わっているのだ。

言葉（音声）を聴覚で聞く感覚入力、言葉を口で発する運動出力、これら両方を同時に働かせてはじめて脳に新しい回路ができていく。この回路をたくさん作っていく、そうするといつの間にか「英語が話せる」状態となる。この回路をたくさん作っていき、中学校英語教育につなげていきたいと考えている。

言葉を話せるようにするには、文字を教える前に耳と口をたくさん使わせることである。

1. 自分が実践してきたこと

(1) 英語授業の基本方針

- ①「読ませず、書かせず、訳させず」
- ②「楽しく」かつ「口頭コミュニケーション能力（聴く話す力）をつける授業をめざす。
- ③なるべく「All in English」ですすめる。
- ④英語での短い指示、ジェスチャアを用いる。
- ⑤授業をパーツに分ける。
- ⑥授業の組み立てを以下のようにしている。

ユニット	パーツ	ポイント
復習など	①あいさつ・日常会話の練習 ②前時までの復習 ③歌	How are you?や、時間、天気、曜日などの応答をテンポよく練習する。
新出表現の練習	④単語練習 ⑤新出ダイアログの状況設定 ⑥口頭練習 ⑦アクティビティ ⑧会話定着のための活動・ゲームなど	①発音と実物・絵による意味把握 ②状況の中でやりとりを疑似体験させる ③ダイアログとその時間に習った英単語を使わせ定着をさせるためのゲーム指導
応用	既習事項をつなげた会話練習、フリートーキングなど	話す力をつける

(2) 英語授業の5つの約束 (年度当初に語ること)

1. 大きな声を出す。
2. 間違いを気にしない。
3. よく聞く。
4. 目を見て話す。
5. 笑顔で活動する。

(3) 活用してきた教材

①フラッシュカード

小学校英語を学習する際に、絶対欠かせない教材。

それは、「フラッシュカード」である。

手早くめくって子どもたちに示し、音声と絵を脳に刻み込むためのものだ。

フラッシュカードを使って練習をするとどんなよさがあるのか。

- (1) 子どもたちが集中する。
- (2) 変化をつけて練習できるので、飽きない。
- (3) テンポよく進み、短時間で繰り返し練習できる。
- (4) 英単語を無理なく楽しく身につけることができる。
- (5) いつでもどこでもできる。

小学校英語。音声中心と言っても、意味・状況が分からなければ、子どもたちは活動が楽しくないだろう。そこで、フラッシュカードを教材として活用する。

基本的に、表のような流れで展開する。

カード5枚を使用した場合、この流れで3～5分で単語練習ができる。

学習する単語によっても、子どもの実態によっても時間は変わってくる。

「曜日」や「形」など、子どもたちにあまりなじみのない単語が多ければ、定着に時間がかかる。教師に続いて繰り返し練習する回数を増やすこともある。

だが、声が小さく、発音がはっきりしないからといって、何度も繰り返し、だらだらと5分以上かけるのは避けたい。だらだらとして雰囲気が悪くなる。

フラッシュカードを使った単語練習の流れ

	活動内容	指 示	留 意 点
1	教師に続いて2回ずつ T : dog S : dog T : dog S : dog	Repeat.	慣れてくれば“Repeat.”を言わなくてもよい。 教師がカードを提示して発音すれば、繰り返し返すようになる。
2	教師に続いて1回ずつ T : dog S : dog		子どもの発音が十分でないときは、その単語を繰り返し練習する。
3	子どもたちだけで S : dog		子どもがしっかりできるようになれば、教師はカードを見せるだけでよい。
4	カードをランダムにして子どもたちだけで	At random.	さっとカードの順番を変える。
5	男子だけ、女子だけ	Boys only. Girls only.	慣れるまでは、“Boys, raise your hand. Stand up!”と指示し、手を挙げ確認をしてから始める。言わずに終わってしまう子がないようにするためである。
6	いろいろなバージョンで		1種類につき、2～3枚程度。テンポよく、楽しく進める。
7	一人ずつ	This line, stand up! One by one.	一列ずつ立たせ、教師が提示したカードを一人一つずつテンポよく発音させていく。言えない時には教師が言ってやり、最後には力強くほめる。
8	一人ですべて挑戦する	Challenger?	一人が5枚すべてに挑戦する。 “Challenger?” とたずね、挙手した子数人をあてる。すべて言い終えたときには自然と拍手が起こる！

②スマートボード

パソコンの画面をプロジェクターで投影すると、タッチパネルになる。

子どもと対面できるのが便利。

また、カードなどよりも大きく提示できるので、子どもたちも集中する。

パワーポイント、スマートノートブック、フラッシュなどのソフトでコンテンツを自作したり、インターネット上のサイトを見せたりした。

2. 児童の感想

- 先生にあわせてネイティブっぽく話すことをがんばった。
- みんなに色々なことを聞いたのが楽しかった。
- 声を大きく出して、ちゃんと覚えた。
- なるべく、大きな声を出した。 ○しっかり発音をまねようとした。
- 発音などをがんばった。 ○友達と楽しくやった。
- いっぱい英語を言ってみた。 ○恥ずかしがらないでできた。
- カードやボールをつかんで遊んだり、国の名前を覚えるのとかが楽しかった。

総務部報告

(総務部長 飯島 光正)

本年度も各部、地区幹事、部長名簿を作成し、全都の地区部長、地区幹事に配布した。また、年間事業は右記の通りである。

①の定期総会は今年度も多くの参加者を集めるねらいで、時間帯を遅らせた。また、昨年度に引き続き講演会は行わなかった。講演会については今後の課題と捉える。

②は、全英連中学部が主催し、本年度で2年目を迎えた。その受付業務のお手伝いをした。

③の関プロ神奈川大会は11月に茅ヶ崎市で行われた。昨年同様、大会が1日開催となった。今年度は「国際社会で共生できる生徒の育成」―学びの意欲と実践的コミュニケーション能力の向上を目指して―を主題に開催された。東京からは、「実践的コミュニケーション能力の育成をめざしたALT活用の工夫」を研究主題に足立区立第十四中学校の三輪政継先生より実践に基づいた提案があった。また、西貝裕武指導主事先生に指導助言を頂いた。関プロ大会への参加者が今年度も少なく、事務局としても苦慮しているところである。少人数指導導入等に伴い、先生方がなかなか現場を離れられない状況や出張の許可が下りない実態を各地区から頂く。今後、研修や研鑽の大切さを見直し、先生方が積極的に研修会等に出られる環境作りを考えていくことは都中英研本部の責務と捉えている。

平成20年11月7日(金)には長野県上田市にて関プロ長野大会が開催される。大会案内を各地区で積極的に紹介していただき、一人でも多くの参加者が集まるよう各地区部長・地区幹事の先生方にご協力を頂きたい。

11月9日、10日には、全英連福島大会が郡山市民文化センター、ビックパレットふくしまにて行われた。

【年間事業】

- ① 5月 定期総会
 - ・資料作成
 - ・受付業務
- ② 7月 「第2回全英連中学部研究協議会」
 - ・受付業務
- ③ 関プロ東京都事務局
 - ・11月関プロ神奈川大会参加事務
(大会案内の発送、大会申し込みの受付等)

事業部報告(1)

第24回授業力アップ研修会

(事業部長 横山 達也)

今年度の授業力アップ研修会は、平成19年10月22日(月)に、府中市立府中第一中学校で開催された。参加者は60名以上で、研究授業が行われた教室に入りきれないほどであった。今回はListening Comprehensionをテーマにして、研究授業と研究協議会が行われた。

1. 研究授業

授業者：岸川 裕子教諭

(府中市立府中第一中学校)

読み物教材を用いて、まとまった物語をListening中心で内容把握することをねらいとした授業であった。生徒がタスクに集中して取り組む様子を見てみると、先生と生徒の信頼関係が、日頃の指導の中でしっかりと築かれていることを感じた。

○Pre-Reading

- ・タイトル（‘A Pot of Poison’）から物語の内容を推測する
- ・ピクチャーカードを見て、質問に答える。
- ・必要最低限の新語の導入。

○Listening Comprehension①

- ・新語の再確認。
- ・登場人物の名前を聞き取る。
- ・CDを聞きながら、ペアでワークシートの絵を並べ替える。

○Listening Comprehension②

- ・CDを聞きながら、ペアで1ページごとにストリップカード（セリフやト書きを1行ごとに切ったもの。ページによって色を変えてある。）を並べる。
- ・CDを通して聞いて答えを確認する。

○Reading Comprehension

- ・CDなしでカードを並べる。
- ・CDを聞いて答え合わせをする。

○Post-Reading

- ・ワークシートの質問にペアで相談して答える。

ListeningとReadingのタスクが非常に工夫されていた。

2. 研究協議会

講師：三鷹市立第三中学校

安原 美代校長

“Do we teach listening comprehension skill?”というテーマで、安原先生から講評をいただいた。

Listeningの特徴やPre-listening, While-listening, Post-listeningという段階についてのお話のあとで、成人向けの教材を使いながら、Listeningのタスクについての説明があった。

また、生徒が内容を聞き取っているかどうかをどうやって判断するのか、生徒に聴く目的をどのように与えるのか、という点についての示唆に富むお話も聞くことができた。

来年度も多くの方に参加していただける、授業力アップに役立つ研修会としたいと思う。

事業部報告(2)

第60回東京都中学校英語学芸大会

(事業部長 横山 達也)

平成19年12月2日(日)に、第60回東京都中学校英語学芸大会が開催された。会場は昨年度と同様に、宝仙学園中学高等学校のHosen Hallであった。今年度の参加校は、スピーキングの部が11校、プレイの部が11校でスピーキングの部が3校増えた。

スピーキングのテーマは、部活動や行事などの学校生活に関するもの、将来のこと、環境問題、映画のことなど、多岐にわたっていた。伝えたいことが英語を通して聞き手にしっかりと伝わってくる、すばらしいものばかりであった。

プレイの部では、「シンデレラ」「葉っぱのフレディ」などの物語や、映画を題材にしたもの、先生が書いた脚本によるものなど、バラエティ豊かな作品を楽しむことができた。中学生が登場人物になりきって、英語で表現するのを見て、参加した生徒たちの努力と、指導された先生方の苦勞がしのばれた。結果ではなく、大舞台で発表できたことを誇りに思っている。

今年度も、宝仙学園の方々には様々な面でお世話になった。年度当初は改築のために使えないというお話だったが、計画が変わったことをすぐに伝えてくださった。盛大な大会ができたことに、感謝したいと思う。

大会記録 12月2日(日)

会場 宝仙学園中学高等学校

スピーキングの部 (参加11校)

1位 Never Give Up

中谷 柁

(荒川区立尾久八幡中学校)

2位 Honden Boot Camp

村上 峰宇

(葛飾区立本田中学校)

特別賞 Japan's Changing Coral

夏目 玲奈

(杉並区立荻窪中学校)

プレイの部 (参加11校)

1位 As It Is in Heaven

東京学芸大学付属

小金井中学校

2位 Cinderella

江東区立大島西中学校

3位 A Little Shining Star 2007

都立両国高等学校付属中学校

特別賞 The Wizard of Oz

練馬区立田柄中学校

審査員 山本 展子先生

(東京都教職員研修センター)

Mr. Edward Weinzeirl (ALT)

児玉 淳先生 (英語検定協会)

今年度も、多くの方々のご協力によって、英語学芸大会を開催することができた。引率の先生方や中英研各部の先生方にも、運営面でお手伝いいただいた。この場をお借りして、お礼を申し上げたい。

調査部報告

Communicative Testingへの挑戦

(調査部長 重松 靖)

◇平成19年度実施状況

まず、中英研コミュニケーションテストが今年度も多くの先生方のご支援とご協力を得て実施することができたことに感謝申し上げます。その実施状況は以下の通りである。

2年 5,633名 (56校)

3年 4,920名 (50校)

総計 10,553名

延べ学校数 106校

学校数 71校

昨年度に比べ10校、881名増加することができた。この中には、昨年度に引き続き京都府の公立中学校1校、今年度新たに参加していただいた都内の私立中学校1校が含まれる。この数字は、昨年4月に出版された「コミュニカティブ・テストングへの挑戦」(根岸雅史、東京都中学校英語教育研究会 編著 三省堂出版)の影響もあると思われる。

本書は、調査部が東京外国語大学教授根岸雅史先生の指導のもとこれまで進めてきたコミュニケーションを意識した問題をまとめ、多くの先生方に参考にさせていただきたいと思い出版していただいたものである。この紙面を借りてその内容の一部を紹介させていただきます。

◇ Communicative Testing への挑戦

筆記試験でコミュニケーション能力を測定しようとする自体難しいことであるが、私たちは以下の点に留意しながらその困難さに「挑戦」している。

○リスニングのテスト

- ・いつ、誰が、どういう場面で何を聞くのかを明示する
- ・英語を聞いて何らかの言語以外の行動を遂行する等オーセンティックなタスクに心がける
- ・できるだけ自然なスクリプトにする

○リーディングのテスト

- ・いつ、誰が、どういう場面で何を読むのかを明示する
- ・看板、広告、ポスター、新聞、雑誌、本などオーセンティックなテキストを利用する

○ライティングのテスト

- ・誰に対して、何のために何を書くのかを明示する
- ・手紙、メール、日記、説明文など自然なテキストを利用する
- ・テストングポイントにあった採点基準とする

○文法のテスト

- ・問題文は「どこで誰が誰に向かって話しているのか」など文脈を明示する
- ・言語の形式よりも意味を重視する
- ・コミュニケーションを実感できる問題にする

○語彙のテスト

- ・文脈を明示する
- ・文法上誤りはない、同じカテゴリーに属するなど、選択肢に留意する
- ・内容語だけでなく機能語もテストする

以上、5つの領域別に基本理念を記したが、根岸先生から繰り返し指導されたことは、場面を明示するとともに、テストの設計図とも言えるしっかりとしたスペック (test specifications) をもち、テストイングポイントに適した問題にする、ということである。

◇テスト参加のお願い

私たちの願いは、1校でも多くの学校に参加していただき、多くの助言をいただきながらよりよい問題づくりを進め、多くの先生方の参考にしていただくことである。ここで改めてコミュニケーションテストの特徴を紹介する。

①2・3年の9月までの履修範囲で、5領域(Listening/Vocabulary/Grammar/Reading/Writing)別に到達度を測り、参加校の平均点を示すことができる。

②領域別にテストイングポイントを明確にして問題を作成するので、観点別学習状況の評価に利用することができる。

Listening / Reading → [理解の能力]

Writing → [表現の能力]

Grammar / Vocabulary →

[言語についての知識・理解]

③結果は個人成績表で返還される。個人票には5領域別に各自の得点と自校の平均点が棒グラフで表示されているので、生徒にとっては自分の反省点が明確になる。また、教師にとっても指導の改善に役立つはずである。

④採点及び結果の分析は教育測定研究所をお願いしており、項目の基本統計量や因子分析等精度の高い分析により、常に問題の妥当性や質をチェックしており、良問であることを心がけている。尚、生徒の氏名

等個人情報は提供していない。

費用は、生徒1人280円。最低限の必要経費のみに抑えているが、採点・成績処理等を委託している関係上御理解いただきたい。年度当初に教材費等としての予算化を願いたい。

◇終わりに

今年度、部長を花小金井南中廣田幸男校長先生から引き継いだ、慣れない仕事のため問題のスプリングミス等の不手際があったことをお詫び申し上げたい。

また、今年もメール等で多くの助言をいただいた東京外国語大学教授根岸雅史先生、熱のこもった議論を重ねながら長時間にわたって問題づくりをしてくれた調査部員に心から感謝申し上げる。

尚、自薦、他薦を問わず調査部に所属し一緒になって研究を進めていただける方は是非一報をいただきたい。

研究部報告

(教科書にあらわれる重要動詞
のコロケーション調査)

(研究部長 北原 延晃)

今年度は平成18年度の研究の続きとして残りの重要動詞全部のコロケーションを調べた。そして平成19年10月にリストが完成した。それぞれの動詞のコロケーションのうち、ベスト5をリストアップした。それと一般のコーパスによるコロケーションの比較分析をした。(比較文献例「コーパス練習帳」投野由紀夫2004年NHK出版)分析結果の一例を紹介しよう。

[lookはlook at～が一番多いがlook for～、look+形容詞、look like～も多い。British National Corpusランキングで2位に入っているlook after～も含めて指導したい。]

授業では語の意味だけを教えるのではなくて、コロケーションも指導し、どういう使われ方が多いのかを生徒がつかめるようにする。特にランキングに入るものはセットフレーズのようにまとめて覚えるように指導したい。

公開授業では研究部員の岸由季教諭(町田市立山崎中学校)が2年生の少人数クラスの授業を公開した。大勢の参加者から活発に質問や意見が出された。

研究についての詳細は研究部ホームページ(<http://www.eigo.org/kenkyu>)を参照されたい。

(「都中英研研究部」で検索も可能)

プロジェクト・チーム部 活動報告

(プロジェクト・チーム部長
安原 美代)

1. 研究テーマ「これからの英語教育の方向性について」

2. 活動内容

①7月19日 部会

今後のプロジェクト部の在り方について検討を行う。

②8月24日、27日、30日 部会

組織体制・研究内容について検討。

高山芳樹先生(東京学芸大学助教授)を招き、英語の教育課題についてお話を伺うとともに、今後の研究の方向性を検討し、部会で確認する。

また、現状において、部員が参加できる体制づくりはどうすれば可能かについても検討する。

- ・ 日常の教室での実践を見直す研究を行う。
- ・ 指導の効果の検証を行い、その成果を広く伝える。
- ・ 研究については高山先生に御指導・助言をいただく。
- ・ 研究のトピックについて、例を挙げて検討する。
- ・ 研究のみならず、部員の日頃の実践について情報交換し、お互いに学びあう機会を設ける。

以上のような内容を協議した。

③3月26日 部会

研究活動計画の作成

出版部報告

(出版部長 池田 武男)

出版部では、例年通り「都中英研だより」と「都中英研会報」を発行した。これらの機関誌は、都中英研の活動内容を都内各中学校の英語科教員に広く知っていただくとともに、情報交換の場として、英語科教員相互の連携を深め、都の中学校英語教育の一層の充実、発展のために役立たせることを目的としている。そして、都内の全中学校及び教育諸機関等へ配布している。今年度の活動状況は以下の通り。

・「都中英研だより」第53号

(7月2日発行)

都中英研会長挨拶、中英研総会報告、役員紹介、コミュニケーションテスト案内、中英研年間事業計画、全英連大会案内、関東甲信地区英語教育協議会案内、等を掲載した。

・「都中英研だより」第54号

(11月30日発行)

全英連中学校部会講演内容報告、各地区英語研究会の紹介（小平市の取り組み）、英語教員集中研修について、サマーワークショップ報告、その他のお知らせ、等を掲載した。

・「都中英研会報」第66号（3月発行）

都中英研の年間活動報告や英語教育活動全般のまとめとして、英語教育関係所感、

英語学芸会報告、都研修センター報告、各地区活動状況、中英研事業報告、各部活動報告、等を掲載し、発行した。

※「都中英研ホームページ」

(7月1日リニューアル)

部会は、年5回開き、その際、各部員個々の研修を深めるための情報交換も熱心に行った。また、英語学芸会をはじめ、各事業へも部員が率先して参加協力した。さらに、編集作業の効率化や経費削減に努めるために、原稿のデータ処理等の取り組みを始めた。なお、リニューアルした都中英研ホームページに「都中英研だより」や「都中英研会報」を掲載することによって、都外へも広く中英研の諸活動が伝えられた模様がうかがえる。今後も一層の責任をもち、編集の改善に図る所存である。

第47回 十五大都市公立中学校
英語教育研究会連絡協議会

神戸大会報告

開催日：平成19年10月12日
於：ホテル北野プラザ六甲荘

「これからの英語教育のあり方」をテーマに、主に以下の内容で協議された。

1 情報交換

各都市がそれぞれの英語教育の目標達成を目指し、困難を乗り越えて様々な工夫を凝らしている姿が紹介された。共通課題は若手教員の育成、小学校英語導入に伴う連携、少人数指導のあり方、ALTの配置などであった。

2 特色ある実績報告

①名古屋市から「学習意欲を高める授業展開とは？」の題で、活動内容を明確にし、学習者の実態を把握して、テンポ良く、教師も楽しめる活動実践の紹介があった。一例として、自己表現文をペアで伝え合い、他の生徒にその内容を発表する活動、歌の活用、班活動で行うListening指導などが紹介された。

②神戸市からはマッピングを利用した「書く」能力の指導について発表された。図のようにテーマを中心におき、サブテーマをその周辺に枝のように配置し、考えをまとめ、全体の内容を深めていく方法である。書く指導については、教科書の音読、暗唱、英文を書かせる→教科書の暗写→Dictation→文法指導→定期的にまとまりのある英文を書かせる指導（中間、期末考查前、テストに出題）の実践とMapping Listeningが紹介された。

3 講演「英語教育を通じてどのような人間形成ができるか」

講師 静岡大学教育学部

英語教育講座教授 三浦 孝先生

①外国語教育は教育基本法にあるように人間形成の一手段である。日本ではESLではなくEFL環境にあるので、動機付けの工夫が必要である。

②人間形成に関わる英語教育のアプローチには教養主義、知的トレーニング、異文化理解、平和・人権・諸国民の連帯、Global Education、Humanistic Language Teaching、授業プロセスを通じてのコミュニケーション教育等がある。

③人間形成を促す英語授業のプロセスには意味のある内容を伝え合う活動であるGenuine Communicationが必要である。

④生徒にとって意味のある授業プロセスでは、例えば、言い換え作文、名刺交換会、Find Someone Who、Chain letterなどの活動が考えられる。

⑤村落共同体の以心伝心が通じない社会となった日本では、これから求められるコミュニケーション教育は次のことが考えられる。言い分や利害をしっかりと言語化して相手に分からせる教育、自己との対話による自己受容、自己尊重の教育、語るべき自己の育成、自他共に生かす複数の解決策を考案できる知恵と柔軟性のあるcommunication workshopの実践、role playingのような体験的コミュニケーション教育、批判的に情報を吟味する聴解、読解、コミュニケーション教育などであるとご教示いただいた。

◎詳細は都中英研のHPを参考にしてください。

(足立区立花畑北中学校 田幸 徹)

第57回 全英連総会 全国英語教育研究大会

(福島大会)

1. はじめに

平成19年11月8日(木)・9日(金)の2日間、郡山市において第57回全英連総会及び全国英語教育研究者大会が開催された。大会コンセプトは「知的な日本人を育成するための英語教育を目指して」が掲げられた。英語を学びながら知識を豊かに身につけ、その過程で自己認識を深め、さらに主体的・積極的に自分たちのコミュニティーにかかわっていき自己の世界観を拡げていくというものである。

2. 総会・記念講演

- (1) 期日：平成19年11月9日(金)
- (2) 場所：郡山市民文化センター
- (3) 内容：挨拶・祝辞・会務報告・新事業の提案承認等があり、滞りなく総会が終了、記念講演が行われた。

講師：東後勝明氏（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

演題：「今、英語教師に最も求められているもの」－教育の原点を見据えて－

英語との長年にかかわる実践を通して熱く時にユーモアを交え、内容の濃いご講演であった。

3. 授業発表

- (1) 高等学校授業実演・協議
実演者：河原田東司教諭（県立橘高）
助言者：滝沢雄一准教授（福島大）

(2) 中学校授業実演

発表者：本田一意教諭（郡山市立郡山第一中）

助言者：富田祐一教授（大東文化大）

- ・前年度まで文科省のSELHi指定を3年間受けての実践研究の成果発表であり、オーラル・イントロダクションを軸としての展開であった。
- ・3年生の「Cell Phones For or Against」ディベートによる授業展開であり、生徒はステージ上という環境にありながらも緊張して応えていた。

4. 分科会

- (1) 期日：平成19年11月9日(金)
- (2) 場所：ピックパレットふくしま
- (3) 内容

①小学校の部：2分科会

- ・教育特区における英語指導他

②中学校の部：7分科会

- ・Reading, Speaking, Listening, Writingの指導とその評価
- ・Effective Team Teaching
- ・基礎学力をつける指導と評価
- ・コミュニケーション能力を育成する指導

③高等学校の部：7分科会

④共通の部：4分科会

5. 全英連の提案等について

全英連会長選挙の案件が提案・承認されたことにより次年度から実施される。また、高校では第1回全国英語スピーチコンテスト決勝大会が2月開催となる。鹿児島大会の終了後の平成21年度全英連総会・教育研究大会は東京での開催と変更になった。

(全英連事務局長 清水研一郎)

第31回 関東甲信地区中学校 英語教育研究協議会 神奈川大会

研究主題

「国際社会の中で共生できる生徒の育成」
～学びの意欲と実践的コミュニケーション能力の向上をめざして～

期日：平成19年11月16日

会場：茅ヶ崎市民文化会館

神奈川大会は茅ヶ崎市民文化会館大ホールで全体会が行われた後、4つの分科会に分かれ寒川町立旭が丘中学校、茅ヶ崎市立中島中学校、茅ヶ崎市立浜須賀中学校、茅ヶ崎市立鶴が台中学校の各会場で開催された。東京は第2分科会の担当となり、「実践的コミュニケーション能力の育成をめざしたALTの活用の工夫」をテーマに足立区立第十四中学校の三輪政継教諭が発表を行った。以下、全体会と第2分科会の概要を報告する。

1 主題設定の理由

戦後の教育界で繰り返し実施されてきた学習指導要領の改訂で、英語の位置づけも変化してきた。英語は「受信」する道具として十分であった時代から「発信」する道具として、更に「交渉」に耐えうる道具として必要性が出てきた。それは、平成10年度の改訂で外国語が必修教科となり、中学校では英語履修が原則となったことから、日本が国際社会で生きていくために英語が欠くことができない言語となったことを物語っている。

こうした目標で英語を習得させるためには、生徒が主体的に学ぼうとする意欲を持ち、国際社会で共生するために必要な実践的コミュニケーション能力の基礎を養うこ

とが必要である。本県では、コミュニケーション能力を「文法能力」「社会言語学的能力」「談話能力」「方略的能力」の4つの能力から成り立っていると捉えた上で、こうした能力を育成していく中でいかに実践的コミュニケーション能力へ結びつけるか、さらに実践的コミュニケーション能力の向上を図りながら、いかに国際社会に将来対応することのできる生徒を育てるかを研究の柱とした。この検証のため、文法事項の指導、ALT活用の工夫、教科書の創造的活用、学習活動・言語活動の設計と指導の4分科会に分かれ具体的方策を探った。

2 記念講演

講師：神奈川大学外国語学部准教授

高橋 一幸先生

演題：これからの英語教育のゆくえ

－中学生の学力の現状と授業改善・
教育課程改訂の課題と方向－

I 求められる現場の自助努力

－生徒の学力の現状と授業実践の課題－

- 1-1 典型的な授業の事例分析
- 1-2 育てたい生徒の具体的イメージを持ち、現在地点を確認する
・授業を定義する
・教師に必要な能力
- 1-3 中学3年生の学力調査より
・「教育課程実施分析調査」の結果分析
・中3全国スピーキングテストの結果分析
- 1-4 授業改善の方法－アクション・リサーチの具体的手順例
- 1-5 再考すべき指導上の課題例と関
- 1-6 関プロ神奈川大会テーマ

II 文部行政に期待することー日本の学校
教育に「構造改革」は起きるのか！

2-1 中学校英語・週4時間による教科での「ゆとり」の確保とその効果的活用

2-2 小学校英語英語活動の位置づけとの明確化と小中連携シラバス構築による中・高英語教育の底上げ

3 第2分科会提案概要

東京からは三輪政継教諭が「実践的コミュニケーション能力の育成をめざしたALT活用の工夫」を「Interactiveな授業を通して」との副題のもとに次のように発表した。

(1) ALT活用の効果

ALTとのTTでは次の点で通常の授業に比べ、次の点でInteractiveな授業ができる。

- ・適切な場面による新出事項の導入
- ・適切な音声指導
- ・言語面での適切なFeedback
- ・非言語（コミュニケーション）での適切なFeedback
- ・意味伝達重視の授業
- ・英語でコミュニケーションを図ることへの自己肯定感の増長

(2) 効果的なALTとのTT授業のために

ア 授業展開

Input→Intake→Outputを基盤とした授業展開が必要である。さらに各段階において適切なFeedbackが必須である。

その際、留意することは次の通りである

- ・教師はNatural Speedで授業を行う。

・Inputの量を増やし、英語のExposureにさらす。

・JETは適切な段階で、明示的な文法指導を行う。

・ALTとともに、JETは

①生徒の話す英語をError Correctionを中心として適宜Feedbackする

②コミュニケーションへの意欲や態度を高めるためのFeedbackをする。

(3) 各段階における活動例

ア Inputの段階

Teacher TalkやOral Introduction等がInputとして考えられる。特に1年生の入門期の指導が大切であり音声を重視し、Interactiveな授業を展開することで、英語を英語として聞き、理解する態度や能力を養うことができる。

イ Intakeの段階

ALTをモデルとして、Dialogueやskitを展開する。さらにPair WorkやPattern PracticeにALTを活用する。

ウ Outputの段階

Writing EssayやInterview等多様なOutputがあるが、Speechに中心を置き、今まで習得した英語を活用し、ALTや他の生徒に理解してもらうことを目標にする。

(4) 今後の課題

普段の授業の中で、いかに生徒にALTとコミュニケーションをとらせるか。生徒の興味や関心に応じた教材開発や活動が大切である。

(豊島区立西池袋中学校長 飯島光正)

各地区の活動状況

千代田区	32右
中央区	33左
港区	33右
新宿区	34左
文京区	34右
台東区	35左
墨田区	35右
江東区	36左
品川区	36右
目黒区	37左
大田区	37右
世田谷区	38左
渋谷区	38右
中野区	39左
杉並区	39右
豊島区	40左
北区	40右
荒川区	41左
板橋区	41右
練馬区	42左
足立区	42右
葛飾区	43左
江戸川区	43右
八王子市	44左
町田市	44右
日野市	45左
青梅市	45右
多摩市	46左
稲城市	46右
八丈町	47左

千代田区

I. 研究主題

「少人数・習熟度別授業の実践と評価評定方法の研究」

II. 活動の経過

◇4月11日 区一斉部会

組織作り、研究主題、活動計画

◇6月13日 部会（麹町中）

・中間考査問題と評価方法の検討

・習熟度別授業のためのワークシート作成の工夫

・パソコンとインターネット上のサイトを利用した教材教具の活用

◇8月22日 夏期研修会（麹町中）

講師：鈴木孝好先生（麹町中）

内容：習熟度別授業の教材研究と応用クラスの精読を中心としたワークショップを行った。

◇10月30日～11月9日海外交流派遣

英国ロンドン市内でのホームステイとウェストミンスター地区中学校での学校生活体験に生徒10名を派遣し、国際交流を図った。

◇11月15日 区連合文化祭（日比谷公会堂）

神田一橋中による英語劇

「オズの魔法使い」

2学年生徒を総動員して取り組み、演技・舞台装置・音楽とも素晴らしく、客席との一体感を味わうことのできた感動的な発表となった。

◇1月16日 研究授業（神田一橋中）

◇2月20日 区ペスタロッツ祭

本英語部会の一年間の成果と課題を発表する場とした。

（麹町中学校 小林恵美子 記）

中 央 区

I. 研究主題

「コミュニケーション能力を高めるための指導の工夫」

- ・ Interview Testの取り組みとその検証
- ・ 少人数編成授業の工夫と改善

II. 活動の経過

- ◇ 4月11日 区教育会一斉部会
組織作り、研究主題決定、活動計画、情報交換
- ◇ 5月23日 定例部会
少人数編成授業の検討
- ◇ 6月20日 区教育会総会
- ◇ 7月9日 定例部会
1学期のまとめと課題検討
- ◇ 9月26日 定例部会
Interview Testの日程決定と内容の確認
情報交換
- ◇ 11月6日～16日
Interview Test 実施 2名のALTと生徒1人の面接形式 中央区中学校全生徒が受験
- ◇ 11月21日 定例部会
- ◇ 12月12日 定例部会
Interview Test のまとめと課題検討
- ◇ 1月23日 区教育会発表会
- ◇ 2月20日 研究授業
- ◇ 3月11日 定例部会
今年度のまとめと来年度への課題検討

(日本橋中学校 長田茂男 記)

港 区

I. 研究主題

「コミュニケーション能力の育成を目指したNTとの授業の工夫」

II. 活動の経過

- ◇ 5月16日
研究主題決め、組織作り、年間計画
- ◇ 6月20日 研究授業
御成門中学校 井村哲也教諭
大学院研究報告 井村哲也教諭
- ◇ 9月12日 研究授業
高陵中学校 日向美貴・尾鼻美子教諭
講 師：ILEC 後関正明先生
- ◇ 11月7日 英語発表会
優 勝 港陽中学校 スピーチ
特別賞 御成門中学校 英語劇
- ◇ 11月16日
英語発表会のまとめ、関プロ神奈川大会報告
- ◇ 2月6日
1年間の研究のまとめ

III. 今後の課題

今年度はNTとのTT授業の充実を図る研究を進めた。研究授業を通して各学校でのNTとの連携の工夫について研修が深まった。また、小・中の英語学習の連携も少しずつ進んできており、教育特区として英語教育の質を高めることができた。今後は、今年度から始まった海外派遣の報告を受け、英語科としての関わり方なども研究していきたいと考えている。

(赤坂中学校長 牛島順子 記)

新 宿 区

I. 研究主題

「指導と評価の一体化を目指して」

- ①評価から評価への精度を高める
- ②小中連携教育の推進

II. 活動の経過

- ◇5月9日 区中研総会・英語部会
組織・研究主題と年間計画決定
- ◇6月25日 小中連携の授業研究
愛日小学校、ALTとのTT
講 師：牛込三中校長 竹田秋人先生
- ◇7月25日 区一斉研究部会
「少人数学習指導のあり方の考察」
講 師：山本新治先生
- ◇8月22日 区英語学芸発表会
四谷区民ホールにて、スピーチ、プレイ、
スキットなどの発表。区内全中学校、富
久小、都立国際高校の参加。
- ◇10月17日 区一斉研究部会
「ALTとの指導のあり方」
講 師：中口達也氏 [インタラック(株)]
- ◇11月12日 授業研究
牛込一中 関 実 教諭
相川徳彦 教諭
講 師：牛込三中校長 竹田秋人先生
- ◇12月2日 都英語学芸発表会
(プレイの部)に参加
新宿中学校 “The Snow White”
- ◇12月4日 小中連携の授業研究
富久小学校、ALTとのTT
講 師：牛込三中校長 竹田秋人先生
- ◇2月25日 小中連携の授業研究
市ヶ谷小学校、ALTとのTT
(西戸山中学校 大森清次 記)

文 京 区

I. 研究主題

「コミュニケーション能力を高める指導の
工夫」

II. 活動の経過

- ◇4月27日 区中研一斉部会
組織作り、研究主題、活動計画決定
- ◇8月16日 サマーワークショップ
中英研事業部主催のサマーワークショッ
プを茗台中にて実施、区内より数名が参
加した。
- ◇9月27日 研究授業(第五中)
授業者：田中徹哉・吉田直樹教諭
対 象：第2学年(少人数指導)
内 容：to不定詞を用いたコミュニケー
ション活動
成 果：ディスカッションを通して、効
果的な少人数指導のあり方につ
いての情報交換をすることがで
きた。
- ◇12月2日 都英語学芸大会
スピーチ部門に茗台中が参加した。
- ◇1月15日 区中研(教科)一斉部会
内 容：
①ALTとのワークショップ
区指導室と区中研の共催により、区内で
教えているALTとのワークショップを
実施した。教材についてのディスカッシ
ョン・マイクロティーチングを通して、
生徒のコミュニケーション能力を育てる
ためのALTとの効果的なチーム・テ
ィーチングのあり方についての理解を深
めることができた。
②全英連大会(福島)の報告
(第一中学校 相沢隆二 記)

台東区

- I. 研究主題
「基礎・基本の定着を目指して」
—様々な授業形態における指導の工夫・改善—
- II. 活動の経過
- ◇4月11日 第1回部会
組織編成、年間予定、研究課題決定
 - ◇5月10日
第1回英語学芸会検討委員会
 - ◇6月13日 第1回授業研究
評価方法について研究
第2回英語学芸会検討委員会
 - ◇7月19日
英語学芸会会場打ち合わせ
 - ◇8月28日 台教研講演会
(ミレニアムホール)
 - ◇9月18日
第3回英語学芸会検討委員会
 - ◇10月10日
台教研一斉部会
研究授業(桜橋中)
授業者: 吉田 俊幸教諭
梅津かおり教諭
ALT: A'kim White
内容: 第2学年を対象に少人数授業を行い、研究協議を行った。
 - ◇11月7日 区英語学芸会
レシテーション2組、
スピーチ11名、プレイ1校が参加
 - ◇2月6日
台教研研究発表会(柏葉中)
研究のまとめ
(上野中学校副校長 醍醐路子 記)

墨田区

- I. 研究主題
「実践的コミュニケーション能力の育成
と指導と評価の一体化」
- II. 活動の経過
- ◇4月18日 区教研一斉部会
組織づくり、研究主題、活動計画、ALTとの情報交換
 - ◇7月4日 研究授業
場 所: 両国中学校
授業者: 山崎昭寿教諭
講 師: 元本所中学校校長
後関正明先生
内 容: 授業の中でのreading活動の重要性等を学んだ。
 - ◇8月23日サマーワークショップ
場 所: 墨田区立墨田中学校 会議室
講 師: 府中市立府中第二中学校
田口徹先生
内 容: 実践的な授業形態とその指導、
実践的なコミュニケーション能力を高める指導について
 - ◇11月16日 区連合学芸会
英語劇
都立両国高校附属中学校
1・2年生参加
 - ◇11月28日 研究授業
場 所: 向島中学校
授業者: 河野敏也教諭
講 師: 文京区教育センター
元文京区立第十中学校長
中村 馨先生
内 容: グループ形式で研究協議を行い、
PCの活用等を学んだ。
(立花中学校 米岡利昌 記)

江 東 区

- I. 平成19年度の研究テーマ
1. 基礎学力の充実を目指した指導と評価の工夫
 2. 実践的なコミュニケーション能力育成を目指した指導と評価の工夫
- II. 活動の経過
- ◇ 5月9日 区中研総会・部会
組織づくり・テーマ設定・日程
 - ◇ 7月3日 研究授業 (T T)
目黒雄平教諭 (南砂中)
A L T Gavin Holdsworth
講 師：山本展子先生
研修センター授業力向上課教授
 - ◇ 7月25日～31日 ワークショップ
British Council・区教委・英語部の共同事業として教授法や英語力向上の研修
 - ◇ 10月17日 研究授業
石井 亨教諭 (深川八中)
講 師：太田 洋先生
駒沢女子大学国際文化学科准教授
 - ◇ 連合英語学会
11月8日 亀戸文化センターで実施。
Speech 18名、Recitation and othersは7校、Play は2校。各部門の1位の中から、審査の結果Play 「Cinderella」 (大島西中) が都大会に出場となった。
12月3日 都英語学会 (宝仙学園) で「Cinderella」 (大島西中) は準優勝に輝いた。
 - ◇ 2月13日 区中研一斉部会
今年度のまとめ、英語学会の総括、来年度計画基本方針、新学習指導要領について諸課題の検討
(南砂中学校長 清水研一郎 記)

品 川 区

- I. 研究主題
1. 英語活動を受けて、中学校のライティングスキルの向上を目指す (研究部門)
 2. 5・6年生から7年生へのスムーズな移行に向けて～文字に親しむ活動に着目して～ (小中一貫部門)
- II. 活動の経過
- ◇ 4月 組織決定
 - ◇ 5月 研究テーマ・年間内容決定
 - ◇ 6月 小中合同研究授業 (浜川小6年)
授業者：深尾絵美子教諭 (浜川小)、井出友加里教諭 (浜川中)
 - ◇ 7月 各部門会
 - ◇ 8月7日
「中学校はどう連携するか」
講 師：大田洋教授 (駒女大)
 - ◇ 8月8日
「小中連携における英語科指導の展開について」
講 師：吉田研作教授 (上智大)
「フォニックスの活用」
講 師：東 仁美講師 (聖学院大)
 - ◇ 9月
「生徒のライティングスキルの向上を目指した指導法の工夫」
講 師：角田幸彦教諭 (墨・本所中)
 - ◇ 10月 発表会準備
 - ◇ 11月8日 学習成果発表会
 - ◇ 11月14日 小中合同研究授業 (平塚小5年)
「スムーズな文字指導を目指して」
授業者：有松裕美教諭 (平塚小)
鈴木淑子講師 (平塚中)
近藤光代教諭 (荏原四中)
「A L T活用」
講 師：下 薫先生 (マジカルキッズ)
 - ◇ 12月 小中合同研究授業 (伊藤学園7年)
「フォニックスを活用したライティング指導」
授業者：河原真夕子教諭 (伊藤学園)
「書くことの指導」
講 師：森住 衛教授 (桜美林大)
 - ◇ 1月 研究発表会準備
 - ◇ 2月 小中合同研究発表
FULL SWING (英語News) 定期発行
(平塚中学校 黒沢かおり 記)

目 黒 区

I. 研究主題

「確かな学力を身に付けさせる指導の工夫」

II. 活動の経過

- ◇4月11日 第1回部会（東山）
 - ・組織作り
 - ・研究主題決め・年間活動計画作成
 - ◇5月9日 第2回部会（東山）
 - ・ダイレクトメソッドに関して研修
 - ◇7月11日 第3回部会（八中）
 - ・公開、見学授業（会話テストの一実践）
 - ◇10月17日 第4回部会（東山）
 - ・研究主題に関する研修、まとめ
 - ◇11月28日 第5回部会（東山）
 - ・研究発表について、原稿確認
 - ◇2月6日 第6回部会（守谷教育館）
 - ・研究発表
 - ・講師：高橋 貞雄（玉川大学教授）
 - ◇11月13日
 - ・目黒区立中学校連合スピーキングコンテスト（めぐろパーシモンホール）
- ※連合行事としてのスピーキングコンテストは今年度で終わる。来年度からは無くなる。

（第八中学校 朴 元綱 記）

大 田 区

I. 研究主題

「コミュニケーションへの関心・意欲を高める導入の工夫」

II. 研究の経過

- ◇4月18日 区教研一斉部会
 - ・組織作り、各部活動計画、情報交換
 - ・授業改善に関わる協議
 - ①中学校英語の授業改善のポイント
 - ②異校種間連携推進
 - ③少人数指導の推進
 - ④指導内容・方法の改善のポイント
 - ⑤評価の改善のポイント
- ◇10月10日 授業研究会
「総合的な学習の時間」
小中連携英語活動
授業者：白石裕彦教諭
東調布第一小学校6年担任
講師：増田 亮先生
大田区教育委員会指導主事
- ◇11月7日連合学芸会（英語の部）
場所：大田区民センター
Speechの部18名、Playの部4校が発表、
区代表は大森第八中学校がPlayの部で都
大会に出場
- ◇12月～2月 研究紀要作成
- ◇2月13日 区教研一斉部会
講演会予定

（馬込中学校副校長 内山哲夫 記）

世 田 谷 区

I. 研究主題

1. 実践的コミュニケーション能力を育む英語指導と評価の工夫
2. 個に応じた指導の工夫と改善－TT、少人数、習熟度別学習、選択学習等において－

II. 活動の経過

- ◇5月16日 前期一斉教育研究会
組織編成、研究主題決定、役員会
- ◇6月6日 区教科研究集会
授業研究 第2回役員会
- ◇7月4日 第3回役員会
- ◇8月20日 夏季研修会
授業研究会、第4回役員会
- ◇9月14日
スピーチコンテスト打ち合わせ
- ◇10月1日
スピーチコンテスト予選会
- ◇10月7日 後期教育研究会
スピーチコンテスト本選
- ◇12月5日
スピーチコンテスト反省会
- ◇1月31日 国立・私立・公立交流会
研究授業
＜研究授業＞
 - 1学期 2・3ブロック研究授業
 - 2学期 4ブロック研究授業
 - 3学期 1ブロック研究授業(三宿中学校長 岡部正直 記)

渋 谷 区

I. 研究主題

「実践的コミュニケーション能力の育成
を目指した指導内容・方法の工夫」

II. 活動の経過

- ◇5月9日 渋中研一斉部会
場 所：広尾中学校
内 容：
 - ・組織作り
 - ・研究主題、年間研修計画策定
 - ・少人数指導、ALTの活用状況についての情報交換
- ◇6月29日 研究授業
場 所：渋谷区立広尾中学校
対 象：3年
授業者：友松 利英子教諭
内 容：論理的な思考力と表現力を高める指導と評価の工夫
参 加：15名
- ◇12月5日 研究授業
場 所：渋谷区立笹塚中学校
対 象：1年生
授業者：菱田 千晶教諭
講 師：元墨田区立本所中学校長
現NPO（特定非営利活動）法人
ILEC言語教育文化研究所
常務理事 後関 正明先生
内 容：実践的コミュニケーション能力
を高める授業の工夫
参加：17名
- ◇2月13日 渋中研一斉研究発表会
場 所：渋谷区立鉢山中学校
内 容：研究報告と今年度のまとめ
講 師：依頼予定
(笹塚中学校長 島本 環樹 記)

中 野 区

I. 研究主題

「基礎基本の徹底と実践的コミュニケーション能力の育成を図る指導の工夫」

II. 活動の経過

◇4月 第1回部会

今年度の組織づくりと、年間活動計画等

◇5月 区中教研総会

◇8月 夏季研修会

中野六中において、サマーワークショップを開催した。

講 師：三鷹市立第三中学校

校長 安原美代先生

テーマ：「指導に生かす評価」

お互いに自由に意見を交換し合い、実りの多い研修となった。

◇10月 区中教研研究日

研究授業を行った。

場 所：中野七中 1年生

授業者：山根真砂子教諭

出口 絹教諭

研究授業後、講演会を行った。

講 師：望月正道先生（麗澤大学）

講演主題：「生徒と楽しむ語彙指導」

A L Tも交えて活発な研修が持てた。

◇11月 区英語学芸会

場 所：野方WIZ

英語劇、スピーチ等の発表があり、裏方等含め、区内全校の英語科教員で運営にあたった。

◇2月 区中英発表会

場 所：中野九中（予定）

講演会と年間の反省等（予定）

（第六中学校 望月 厚 記）

杉 並 区

I. 研究主題

「実践的コミュニケーション能力を高める指導と評価～小学校との連携を見据えて～」

II. 活動の経過

◇4月18日(水) 杉教研一斉部会

◇5月16日(水) 杉並教育研究会総会

◇6月13日(水) 杉教研英語部会

内 容 「教科書の効果的な指導法及びデジタル教科書の使用方法」

◇8月1日(水)～3日(金)

内 容 英語科ワークショップ

○「Vocabulary building及びWritingの指導」

○授業研究1 「だれでもできるふだんの授業の工夫」

○授業研究2 「I C T（情報通信技術）を活用した英語の授業」

○講 演 「『やりなおし英語』から見た中学校英語への提言」

○「外国とのインターネットTV会議実践報告と英語学習意欲アンケート調査結果報告」及び情報交換

◇10月3日(水) 幼小中合同教育研究会

内 容 授業研究

授業者 東田中 石川直美教諭

富村僚子補助教員

◇11月16日 英語学芸発表会

◇12月2日 東京都英語学芸大会

参加校 杉並区立荻窪中学校

◇1月15日 英語科ワークショップ

◇2月中旬 杉並区リスニングコンテスト、
1・2年生対象

◇2月20日 杉教研一斉部会

（東田中副校長 森戸 繁 記）

豊 島 区

I. 研究主題

「実践的コミュニケーション能力を育成
する指導法の工夫」

- ◇ 4月18日 区中研一斉部会
組織作り、研究主題、年間活動計画、小
学校英語活動について、都英語集中研修
参加者の確認
- ◇ 7月27日
第2回区中研英語部会（西池袋中）
内 容：指導法の工夫について
少人数指導について
- ◇ 11月7日 区中研一斉部会
研究授業と研究協議
授業者：安島 則男教諭
単 元：2年 Lesson6
「Ratna Talks about India」
講 師：中村 馨先生
(前文京第十中学校長)
「教科書本文を中心とした授業の組立て」
- ◇ 1月16日 区中研教科発表会(巣鴨北中)
研究授業と研究協議
授業者：片野知果教諭(巣鴨北中)
情報交換
 - ・ALTの時数、少人数指導等
 - ・小学校英語活動との接続について(西池袋中学校長 飯島光正 記)

北 区

I. 研究主題

「実践的コミュニケーション能力の育成」
－小学校英語活動との連携を目指して－

II. 活動の経過

- ◇ 5月2日 第一回北区一斉部会
組織作り、研究主題、活動計画
- ◇ 7月31日 夏季研修会講演会
「小学校英語活動について」
場 所：桐ヶ丘中
講 師：渡邊寛治先生
- ◇ 10月18日 第二回北区一斉部会
場 所：王子桜中、公開授業
鈴木志津子教諭
講 師：後関正明先生
- ◇ 2月14日 学校視察会
場 所：東京インターナショナル・スク
ール
内 容：授業見学と協議会
ICTを活用した英語教育実践について
視察と研究協議
(桐ヶ丘中学校副校長 永嶋昌博 記)

荒 川 区

I. 研究主題

1. 小中英語教育の効果的連携
2. 習熟度別授業の工夫
3. 学習意欲を高める指導法

II. 活動の経過

- ◇4月18日 第1回部会
組織・研究主題・活動計画の決定
- ◇7月11日 第2回部会
講演会：学習意欲を高める指導法
講 師：小寺令子先生（文京十中）
スピーチコンテスト実施要項検討
- ◇9月19日 第3回部会
小中合同研究授業 諏訪台中2年
内 容：習熟度別授業の工夫
授業者：山崎 聡、佐藤 薫
富沢あかね教諭
講演会：小中英語教育の連携
講 師：中村 馨先生
（文京区教育センター専門指導員）
- ◇11月6日 スピーチコンテスト
- ◇11月21日 第4回部会
研究授業：原中1年
内 容：ICTを使った英語の授業
授業者：石橋幸子、相沢清隆教諭
講演会：ICTの利用促進
講 師：井川行正先生
（情報教育アドバイザー）
- ◇1月16日 第5回部会
小中合同研究授業：汐入小1年
授業者：矢崎美弥子教諭
講 師：富田祐一教授（大東文化大）
- ◇2月13日 第6回部会
教育研究会発表会：研究報告
（尾久八幡中学校主幹 青木 豊 記）

板 橋 区

I. 研究主題

「書くことの指導と評価の在り方」

II. 活動の経過

- ◇4月18日 「区中研一斉部会」
役員選出、研究主題及び研究活動計画等の決定
- ◇6月1日 「1学期研究授業」
・授業者：中山信一教諭（加賀中）
・単元：ニュークラウン2 L3
- ◇8月24日 「夏季ワークショップ」
・「教材・言語活動の工夫」
・「ALTとの効果的なTT」
講 師：英語教育コンサルタント（ALT）
- ◇11月8日 「英語のつどい」
・出演校13校（スピーチ、プレイ、リーディング等の発表）
※都の英語学芸大会には西台中がプレイで参加決定
- ◇11月14日 「区中研一斉研究授業」
・授業者：山崎隆義教諭（赤塚一中）
・単 元：ニュークラウン1
“DO IT TALK 4”
・講 師：板橋区立西台中学校
阿字宏康校長
- ◇1月28日 「3学期研究授業」
・授業者：粟飯原真教諭（志村一中）
・単 元：ニュークラウン2 L7
・講 師：板橋区立板橋第三中学校
稲葉秀哉校長
- ◇2月6日 「区中研研究発表」（板二中）
「書くことの指導と評価の在り方」
・発 表：志三中、上一中、上二中、高
一中
・講 師：英語教育コンサルタント
（板橋第三中学校長 稲葉秀哉 記）

練馬区

I. 研究目標

基礎・基本の定着を図り、実践的コミュニケーション能力の基礎を培う。

(ア) 4技能を関連させた効果的な指導の工夫・改善を図る。

(イ) A L T等の効果的な活用を図り、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

(ウ) 英語科教員の資質向上を図るため、夏期研修や授業研究を充実させる。

II. 活動の経過

◇5月16日 区中研一斉部会

組織・研究目標・年間活動計画決定

◇6月20日 授業研究会

授業者：荒川高広教諭（大泉西中）

◇8月2日・3日 夏期研修会

*「小中英語連携教育の取組み」

講師：飯島光正先生

（豊島区立西池袋中学校長）

山田 仁先生

（品川区立城南小学校教諭）

*「中学校教員の英語力向上に向けた研修」

講師：竹下裕子先生

（東洋英和女学院大学教授）

*「英語語彙の指導」

講師：望月正道先生

（麗澤大学教授）

*「コミュニケーション アクティビティー」

講師：羽井佐昭彦先生

（相模女子大学教授）

◇11月4日 英語学芸会 11校参加

“The Wizard of Oz”（田柄中）

都大会に参加 特別賞受賞

◇11月7日 授業研究会

授業者：富山 健教諭（石神井中）

◇2月21日 授業研究会

授業者：伊藤あすみ教諭（開進二中）

（中村中学校 平林澄子 記）

足立区

I. 研究主題

「基礎学力の定着をはかる指導の工夫」

II. 活動の経過

◇4月26日 区中研一斉教科部会

組織作り、研究主題、活動計画

◇8月2日 夏季研修会

場所：足立区立第十四中学校

内容：授業での効果的なA L Tの活用

講師：足立区教育委員会

指導主事 西貝 裕武先生

◇10月19日 区連合英語学芸会

場所：西新井文化ホール

スピーチ・劇・スライドショー17校参加

◇11月13日 五英研 研究授業

場所：足立区立第六中学校

授業者：紺野 正典教諭

参加：50余名

◇12月18日 東京教師道場公開授業

場所：足立区立竹の塚中学校

授業者：上尾 栄美子教諭

講師：足立区教育委員会

指導主事 西貝 裕武先生

◇12月19日 東京教師道場公開授業

場所：足立区立扇中学校

授業者：柴野 康行教諭

講師：足立区教育委員会

指導主事 西貝 裕武先生

◇2月6日 区中研一斉教科部会

場所：足立区立第十四中学校

授業者：三輪 政継教諭

（第八中学校 柏木圭子 記）

葛 飾 区

I. 研究主題

「基礎学力の定着を図り、実践的なコミュニケーション能力を育成する英語指導と評価の工夫」

II. 活動の経過

◇ 4月16日

ALT導入全校説明会、割当調整会議

◇ 5月30日 葛中研全員部会

事業報告、会計報告、役員選出、事業計画、予算案、情報交換

◇ 6月21日 研究授業・研究協議会

対 象：2年生

授業者：関口 智教諭（常盤中）

講 師：及川 賢先生

（埼玉大学教育学部准教授）

◇ 9月28日 役員会・スピーチ&プレイコ

ンテスト運営委員会：事前打ち合せ

◇ 10月11日 第22回葛飾区立中学校英語

スピーチ&プレイコンテスト

（アイリスホール）

レシテーション：12名、プレイ2校、

スピーチ22名参加

12月の都英語スピーチで2位入賞

◇ 10月22日 研究授業・研究協議会

対 象：3年生

授業者：小川登子教諭（葛美中）

講 師：北原延晃先生

（狛江市立狛江第一中学校教諭）

◇ 2月15日 研究授業・研究協議会

授業者：石川智文教諭（双葉中）

◇ 3月 役員会

19年度反省と20年度計画、予算

（高砂中学校長 余野直紀 記）

江 戸 川 区

I. 研究主題

「実践的Communication能力を育成するための指導法の研究と授業力向上」

II. 活動の経過

◇ 5月9日

英語部役員会、総会、研究目標、活動計画、組織作り。

◇ 5月26・27日

「青少年の翼」（中高校生海外派遣）英語面接委員

◇ 6月27日 区中研一斉研究日

・研究授業 三和あかね教諭（松江五中）

授業内容 New Crown 2 Lesson 4

・講 師 高橋貞雄教授（玉川大学）

演 題「実践的なコミュニケーション能力を育成するための指導方法と授業力向上」

講演では、授業を振り返るためのチェックポイント10項目を紹介され、また、自立した学習者を育てること、より多くの指導法のバリエーションを持つこと等の指導をいただいた。

◇ 8月23日 夏季英語部研修会

「実践的コミュニケーション能力をふまえて、教科書をどう指導するか」

学年ごとに三つの分科会に分かれ、二期期に行う予定のレッスンの授業案、アイデア、視聴覚補助教材、資料を持ち寄り話し合いを行った。

◇ 11月7日 区内中学校2、3年生

スプリング・コンテスト実施。

◇ 1月22日 英語部研修会

・研究授業 佐藤みち子教諭（小岩三中）

・講評 森住 衛 教授（桜美林大学）

講 演「授業改善—新しい学習指導要領の展望をふまえて—」

（小岩第二中校長 篠原温雄 記）

八 王 子 市

I. 研究主題

「生徒が意欲的に参加する授業を目指して」

II. 活動の経過

◇4月16日 部会

①本年度の役員の確認

②本年度の研究内容の検討

今まで、市で行なっていた夏の研修（パワーアップ研修）を英語部会で行なうことになり、その内容を各校にアンケート配布。

◇7月31日 パワーアップ研修会

（八王子教育センターにて）

○講 師（財）英語教育協議会（ELEC）
Steven Ashton（スティーヴンアシュトン）

○テーマ

「授業に役立つワークショップ」

○講演内容

夏期集中研修に見られるような授業で使える様々な実用的な言語活動

○講 師 北原 延晃

（都中英研研究部長・狛江第一中学校）

○テーマ

「意欲的な生徒を育てる言語活動」

○講演概要（レジュメ見出し）

データが証明する少人数授業の威力

・授業の展開例（各学年）、語彙指導（フラッシュカードの具体的指導例等）、4技能、評価等

その他、いかに生徒が自覚を持ち、力を伸ばすか。市内50名の先生が参加。

（長房中学校 赤池義弘 記）

町 田 市

I. 研究主題

「実践的コミュニケーション能力を高めるための指導と評価の工夫」

II. 活動の経過

◇4月11日 市中教研一斉部会

・組織・研究主題と年間計画決定

◇8月3日 夏のワークショップ

・講 師：神奈川大学外国語学部

准教授 高橋 一幸先生

・内 容：「実践的コミュニケーション能力を育成する授業および活動設計とその指導」

・講 師：江東区深川第一中学校

教諭 原田 博子先生

・内 容：「実践的コミュニケーション能力の基礎を築く指導」

◇11月14日 市中教研一斉部会

・町田市小中一貫町田っ子カリキュラム（英語教育）についての説明

・ポトラックセミナー

◇2月13日 市中教研一斉部会

ワークショップ

・講 師：駒澤女子大学

准教授 太田 洋先生

・内 容：教科書の活用法について

（金井中学校教諭 丸橋秀哉 記）

日 野 市

I. 研究主題

「言語活動を積極的に取入れた授業」

II. 活動の経過

- ◇ 5月16日 市中教研総会
・組織作り・研究主題決定
- ◇ 6月18日 研究授業
第三中 青柳 玲子 教諭
講 師：牛込第三中学校
校長 竹田 秋人 先生
- ◇ 7月4日 ICT の活用①
三省堂の協力による
デジタルテキストに関する研修
- ◇ 9月5日 ICTの活用②
各校で、ICTの活用研修
- ◇ 10月3日 ICTの活用③
平山中学校にて、市内各校でのICTの
活用状況についての発表およびデモン
ストラクション
- ◇ 11月9日 研究授業
平山中 大川 京子 教諭
(東京教師道場 第七回 授業研究)
- ◇ 2月13日 市中教研 一斉部会
(七生中学校 笠原光史 記)

青 梅 市

I. 研究主題

「ひとり1人の学ぶ意欲を引き出しコミ
ュニケーション能力を育てる指導の工
夫」

II. 活動の経過

- ◇ 5月19日 市教研一斉部会
組織作り、研究主題、年間計画の決定
(霞台中学校)
- ◇ 8月22日 夏季ワークショップ
「2学期の授業に役立つ50分授業の組み
立て方」
講 師：府中市立府中第二中学校
田口 徹先生
内 容：リズム感のある授業をどう組み
立てたらいいか。50分間の授業
のデザインの方法とそれぞれの
場面でのねらいとポイントにつ
いて学ぶことができた。
- ◇ 11月9日 研究部会 (霞台中学校)
内 容：定期テスト問題の作成と評価に
ついて各校の定期テスト問題を
持ち寄り、問題作成のねらいや
評価の観点について学習した。
- ◇ 2月7日 研究部会 (青梅市立第六中学校)
研究授業 青梅市立第六中学校2年
授業者：百合野麻莉
講 師：府中市立府中第二中学校
田口 徹先生
夏季ワークショップの成果を研究授業で
検証する。
(青梅第六中学校 増澤 強 記)

多 摩 市

I. 研究主題

「ALTとの効率的な授業展開」

II. 活動の経過

◇5月16日 多摩市中教研教科部会
組織作り・年間活動計画の決定

◇6月13日 研究授業
実施校：多摩市立貝取中学校 3年
授業者：横山達也教諭（和田中）
Mr. Edward Weinzierl氏(TATE)
“Be Basket”というBe同士を使ったゲームを通して、am、is、areのどれを使うのかを楽しみながら生徒に定着させる授業であった。多摩市の3人のTATE(ALT)との情報交換も行われた。

◇11月7日 ワークショップ
講 師：太田 洋先生
(駒沢女子大学准教授)

「Listening、Speakingの指導のTips」というテーマで、中学校の教科書を使った具体的な指導例を教えていただいた。また、参加者もアイデアを出したり、生徒になったりしながら学んだ。さまざまな指導方法を知ることができて、有意義な研修会であった。

◇1月30日 研究発表会
豊ヶ岡中学校・諏訪中学校
落合中学校
平成18・19年度 多摩市教育委員会研究奨励校として、上記3校で公開授業と研究発表会が行われた。
(和田中学校 横山達也 記)

稲 城 市

I. 研究主題

「進んで英語を使ってコミュニケーション活動をする児童・生徒の育成」
－効果的なinputの方法の研究

II. 活動の経過

◇4月18日 市教研総会・部会組織編成、
研究課題決定

◇5月9日 ワークショップ
「授業の組み立て方」
講 師：太田洋先生（駒沢女子大学）

◇6月13日 ワークショップ
「英語教師のための発音指導」
講 師：蒔田守先生（筑波大附属中）

◇8月27日 研究授業指導案検討

◇8月27日 ワークショップ
「インテイクを促進する活動」
講 師：増渕素子先生（稲城六中）

◇9月12日 小学校研究授業
授業者：松下智子先生（若葉台小）
講 師：馬郡敏美先生
(松香フォニックス研究所)

◇10月10日 中学校研究授業
授業者：堀恵美子先生（稲城五中）
講 師：石鍋浩先生

(稲城市教育委員会指導室長)

◇11月14日 中学校授業体験
授業者：宮崎太樹先生（稲城一中）

◇1月9日 研究のまとめ

◇2月6日 教育研究会発表会
(稲城第一中学校 宮崎太樹 記)

八 丈 町

I. 研究主題

1. 基礎学力の充実を目指した指導と評価の工夫
2. 実践的なコミュニケーション能力の育成
3. 高等学校、小学校との連携

II. 活動の経過

◇4月26日 第1回部会

- ・八丈町教育委員会との拡大部会
八丈町の外国人講師学校配当、スケジュール調整

◇10月13日 第2回部会

- ・情報交換
- ・「コミュニケーション能力を身につける授業の工夫」についての各学校での実践報告
- ・教授法と英語力向上の研修

◇1月26日

- ・八丈島中学校共通テスト問題についての検討、実施について
- ・国際理解教室について

◇2月4・5日

八丈島巡回国際理解教室実施

講師にボスニア・ヘルツェゴビナの方を迎え異文化理解の機会、国際交流の場とし、事前・事後学習も実施

◇2月26日 第4回部会

- ・八丈中学校共通テストの実施結果の分析と今後の指導方法についての検討と研究

(三原中学校 高橋雅美 記)

平成19年度
中英研事業報告

1. 4月16日(月) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①役員組織等の確認
②年間事業計画の検討
③中英研定期総会に向けて
④役員会の日程
⑤関プロ神奈川大会
⑥全英連関係等
2. 5月17日(木) 定期総会・懇親会
於：豊島区立勤労福祉会館
①18年度事業報告
②18年度決算報告
③18年度会計監査報告
④新役員の承認
⑤19年度基本方針の承認
⑥19年度事業計画・予算の承認
◎懇親会
3. 6月14日(木) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①全英連中学部研究協議会について及び全英連福島大会について
②関プロ神奈川大会について
③地区部長、幹事名簿について
④十五大都市大阪大会について
⑤中英研だよりについて
⑥サマーワークショップ関係
⑦コミュニケーションテストについて
⑧都中英研ホームページについて
4. 7月2日(月)
「都中英研だより」第53号発行
5. 7月17日(火) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①全英連中学部研究協議会について
②関プロ神奈川大会進捗状況
③サマーワークショップ関係
6. 7月26日(木)
全英連中学部会研究協議会
於：国立オリンピック記念青少年総合センター
講演：「英語教育課題とこれから」
講師：平田 和人氏
(文部科学省初等中等教育局教科調査官)
7. 7月～8月
中英研学力調査問題の作成
8. 7月30日(月) 第1回研究部夏期語彙指導ワークショップ
於：中央区立銀座中学校
指導者：関口 智
(葛飾区立常盤中学校教諭)
矢木美記子
(板橋区立高島第三中学校教諭)
花田佐和子
(杉並区立和田中学校教諭)
8月2日(水) 第2回研究部夏期語彙指導ワークショップ
於：品川区立小中一貫校日野学園
指導者：北原 延晃
(狛江市立第一中学校教諭)
岡崎 伸一
(品川区立小中一貫校日野学園教諭)
岸 由季
(町田市立山崎中学校教諭)
- 8月24日(金) 第3回研究部夏期語彙指導ワークショップ
於：江東区立深川第八中学校
指導者：石井 亨
(江東区立深川第八中学校教諭)
浜内 明
(足立区立第十中学校教諭)
原田 博子
(中央区立銀座中学校教諭)
9. 8月16日(木)
英語科教員サマーワークショップ
於：文京区立茗台中学校
①小学校の英語活動で今行われていること
②教師道場で学んだこと、授業で何が変わったか?

- ③生徒が力をつける授業作りの基礎・基本
講師：山田 仁
(品川区立城南中学校教諭)
田中 清美
(福生市立福生第二中学校教諭)
田口 徹
(府中市立府中第二中学校教諭)
10. 8月24日(金) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①関プロ神奈川大会について
②全英連福島大会について
③コミュニケーションテスト問題の検討
11. 9月26日(水) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①関プロ神奈川大会関係
②全英連福島大会について
③全英連の開催県の変更について
12. 10月12日(金)
第47回15大都市公立中学校英語教育研究連絡協議会
於：神戸市
13. 10月22日(月) 授業力アップ研修会
於：府中市立府中第一中学校
授業者：岸川 裕子
(府中市立府中第一中学校教諭)
講師：安原 美代
(三鷹市立第三中学校校長)
14. 10月30日(火) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①関プロ神奈川大会について
②全英連福島大会について
③各種研修会報告
15. 11月9日(金) 10日(日)
第57回全国英語研究大会福島大会
於：郡山市民文化センタービックパレット福島
16. 11月10日(金)
第31回関プロ神奈川大会
於：茅ヶ崎市
主題「国際社会の中で共生できる生徒の育成」
－学びの意欲と実践的コミュニケーション能力の向上をめざして－
17. 11月29日(木) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①都英語学芸大会について
②コミュニケーションテストについて
③研究部授業公開と研究発表について
④関プロ神奈川大会、全英連福島大会の報告
18. 11月30日(金)
「都中英研だより」第54号発行
19. 12月2日(日) 第60回英語学芸大会
於：宝仙学園
20. 1月22日(火) 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①研究部発表会の準備
②平成20年度役員人事案
③全英連組織改善について
④平成20年度事業計画について
21. 2月22日(金) 中英研研究部発表会
於：町田市立山崎中学校
①研究授業：岸 由季教諭
②研究発表「重要動詞のコロケーション調査」
③指導講師：猪俣 俊哉先生
(室蘭市立陣屋小学校教頭)
22. 2月下旬 役員会
於：南大塚地域文化創造館
①研究部発表会の報告
②平成20年度役員人事について
③次年度活動計画について
④中英研ホームページについて
23. 2月下旬 「中英研会報」第66号発行
24. 3月初旬 役員会
①19年度各部事業報告
②19年度決算報告
③次年度新役員構成の確認
④次年度総会について
⑤情報交換
⑥研修会
(総務部長：飯島 光正 記)

東京都中学校英語教育研究会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は東京都中学校英語教育研究会と称する。
- 第2条 本会は事務局を会長の場所に置く。
- 第3条 本会は東京都中学校の英語教育関係者を会員とする。

第2章 目的及び事業

- 第4条 本会は中学校英語教育に関する事項を研究し、会員の識見の向上に努めると共に、英語教育の振興を図ることを目標とする。
- 第5条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1. 各種研究会の開催（研修会、発表会、講演会等）
 2. 研究調査（コミュニケーションテスト、入試問題分析等）
 3. 各種英語教育団体との連絡
 4. 機関誌発行、図書推せんおよび刊行
 5. その他、本会の目的達成に必要な事業

第3章 役員及び幹事

- 第6条 本会には次の役員および幹事をおく。
1. 会長1名
 2. 副会長若干名
 3. 部長各部ごと1名
 4. 副部長各部ごと若干名
 5. 会計監査2～3名
 6. 幹事各区市ごとに1～2名
- 第7条 役員を選出は次のとおりとする。
1. 会長・副会長は役員会の推薦により、総会の承認を得なければならない。
 2. 部長・副部長は役員会の推薦により、会長が委嘱する。
 3. 会計監査は役員会の推薦により、会長が委嘱する。
- 第8条 役員の仕事は次のとおりとする。
1. 会長は本会を代表し、会務を総括する。
 2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行すると共に、各部を分担する。
 3. 部長は担当副会長と協議の上、部会を召集し、会務を執行する。
 4. 幹事は本部との連絡にあたる。

5. 事務局は総務部が担当し、事務局長は総務部長があたる。
6. 会計監査は会計の監査を行い、その結果を総会に報告する。

第9条 役員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

第10条 本会に相談役、参与及び顧問をおくことができる。

1. 相談役はOB会長及び副会長より、参与は現職校長より役員会の推薦により会長が委嘱する。
2. 顧問は英語科出身の指導主事より会長が委嘱する。

第4章 会 議

第11条 会議は次のとおりとする。

1. 総 会 毎年1回会長が召集し、会務の報告、役員的人事、予算、決算等を審議し、決定する。ただし、必要がある場合は臨時に開くことができる。
2. 役員会 会長・副会長・部長をもって構成し、必要に応じて副部長・会計監査を加え、会長の諮問機関とする。
3. 幹事会 役員・幹事をもって構成し、学期1回以上例会を開き、会務を執行する。

4. 部 会

総務部 庶務・会計・渉外および他部に属さない事項の処理

事業部 会の年間計画・英語学会・研修会、その他会長より委嘱された事業の立案・計画・推進

調査部 コミュニケーションテストほかに英語教育に関する調査の実施

研究部 英語教育に関する研究の推進ならびに授業研究の実施

出版部 中英研だより・会報などの発行

第5章 会 計

第12条 本会の会費は東京都中学校研究会よりの交付金をもってあてる。

第13条 本会の経費は会費およびその他の収入による。

第14条 本会の予算・決算は総会の承認を得なければならない。

第15条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 付 則

第16条 本会則は昭和60年4月1日より実施する。

第17条 本会則の変更は総会の承認を得なければならない。

第18条 細則は幹事会で定めることができる。

平成19年度 東京都中学校英語教育研究会役員名簿

役名	氏名	所 属 校	職 名
会 長	備里川正人	足立区立第十四中学校	校 長
副 会 長	竹下 賢	渋谷区立松濤中学校	”
”	清水研一郎	江戸川区立南砂中学校	”
”	田 幸 徹	足立区立花畑北中学校	”
”	大野容義	昭島市立清泉中学校	”
”	井田宗宏	東久留米市立東中学校	”
”	廣田幸男	小平市立花小金井南中学校	”
P T部長	安原美代	三鷹市立第三中学校	”
総務部長	飯島光正	豊島区立西池袋中学校	”
経理部長	牛島順子	港区立赤坂中学校	”
副 部 長	福井正仁	大田区立大森第七中学校	副 校 長
”	石川真知子	足立区立第九中学校	主 幹
”	藤原 進	大田区立矢口中学校	教 諭
部 員	田中誠一郎	東村山市立第四中学校	”
”	福島恵子	練馬区立光が丘第三中学校	”
”	近藤 浩	東久留米市立久留米中学校	”
”	堀之内国義	渋谷区立本町中学校	”
”	石川容子	足立区立第十二中学校	”
”	新野美紀	西東京市立田無第三中学校	”
”	滝口 均	世田谷区立八幡中学校	”
”	長尾 諭	大田区立石川台中学校	”
”	佐々木昭央	豊島区立貫井中学校	”
事業部長	横山達也	多摩市立和田中学校	教 諭
副 部 長	田口 徹	府中市立府中第二中学校	”
”	田島久士	世田谷区立喜多見中学校	”
”	相沢隆二	文京区立第一中学校	”
”	米澤登志子	中野区立第十一中学校	”
”	多田 涉	大田区立大森第二中学校	”
”	吉澤ひとみ	足立区立千寿桜堤中学校	”
”	明石達彦	千代田区立九段中等教育学校	”
”	大屋 剛	練馬区立関中学校	”

役名	氏名	所属校	職名
部員	雲出和子	三鷹市立にしみたか学園第二中学校	教諭
"	斉藤節子	清瀬市立清瀬第二中学校	"
"	竹中敬子	都立城南養護学校	"
"	漆畑拓也	世田谷区立船橋中学校	"
調査部長	重松靖	国分寺市立第二中学校	副校長
副部長	本多敏幸	江東区立深川第八中学校	主幹
部員	鈴木悟	港区立港南中学校	教諭
"	阿久津仁史	文京区立第八中学校	"
"	兼子真季	文京区立本郷台中学校	"
"	斉藤豊	江東区立第三亀戸中学校	"
"	白井靖子	江東区立第二大島中学校	"
"	佐藤恵美	墨田区立文花中学校	"
"	白川智恵子	練馬区立大泉北中学校	"
"	小椋由紀子	荒川区立第三中学校	"
"	伊地知可奈	練馬区立八坂中学校	"
"	大森博	練馬区立中村中学校	"
"	大澤陽子	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	"
"	木村弘恵	世田谷区立砧南中学校	"
"	山崎満理	世田谷区立烏山中学校	"
"	三木謙二郎	大田区立馬込中学校	"
"	田中すみ子	豊島区立西巢鴨中学校	"
"	阿坂真人	日野市立第四中学校	"
"	川口三保子	府中市立府中第六中学校	"
"	岸川裕子	府中市立府中第一中学校	"
"	野口哉寿子	小平市立第六中学校	"
研究部長	北原延晃	狛江市立狛江第一中学校	教諭
副部長	石井亨	江東区立深川第八中学校	"
"	鶴田峰子	中央区立銀座中学校	"
"	関口智	葛飾区立常盤中学校	"
部員	二宮正男	新宿区立西戸山中学校	"

役名	氏名	所屬校	職名
部員	原田博子	江東区立深川第一中学校	教諭
"	溪内明	大田区立東調布中学校	"
"	杉本薫	江東区立東陽中学校	"
"	岸由季	町田市立山崎中学校	"
"	矢木美記子	板橋区立高島第三中学校	"
"	岡崎伸一	品川区立日野学園中学校	"
"	稲葉高広	世田谷区立尾山台中学校	"
"	坂田恵子	北区立飛鳥中学校	"
"	丸山篤広	大田区立羽田中学校	"
"	福井洋子	稲城市立第三中学校	"
"	金子健次郎	大田区立大森第七中学校	"
"	横山牧子	多摩市立貝取中学校	"
"	花田佐和子	杉並区立和田中学校	"
"	永松朋美	江東区立第三砂町中学校	"
"	石崎真爾	足立区立第十一中学校	"
"	佐々木孝紀	江東区立深川第七中学校	"
出版部長	池田武男	西東京市立田無第四中学校	副校長
副部長	平林澄子	練馬区立中村中学校	教諭
"	渡辺雅子	足立区立六月中学校	"
"	小柳守生	文京区立第十中学校	"
部員	萩原時男	文京区立第三中学校	"
"	下路博朗	足立区立第四中学校	"
"	三岡一隆	練馬区立石神井西中学校	"
"	今本由美子	練馬区立大泉中学校	"
"	中井正弘	東久留米市立中央中学校	"
"	田中典子	足立区立江北中学校	"
"	赤塚貴音	練馬区立大泉第二中学校	"
"	鈴木咲子	東村山市立第七中学校	"
"	岡部芳枝	文京区立文林中学校	"
"	小林美保	江戸川区立瑞江中学校	"
"	塩田裕明	東久留米市立南中学校	"

プロジェクト・チーム部

役名	氏名	所属校	職名
部長	安原美代	三鷹市立第三中学校	校長
副部長	石川賢司	墨田区立墨田中学校	副校長
”	松永透	西東京市立田無第二中学校	”
部員	原田博子	江東区立深川第一中学校	教諭
”	上尾恵美子	足立区立竹の塚中学校	”
”	岸川裕子	府中市立府中第一中学校	”
”	大内由香里	江戸川区立葛西第三中学校	”
”	小柳守生	文京区立第十中学校	”
”	佐藤順一	江東区立南砂中学校	”

平成19年度 顧問

氏 名	役 職
松岡敬明	東京都職員研修センター研修部教育開発課長
原田承彦	練馬区教育指導課長
宇田剛	青梅市指導室長
新庄恵子	国分寺市指導室長
石鍋浩	稲城市教育部参事指導室長事務取扱
川越豊彦	学務部高等学校教育課統括指導主事
滝澤佳弘	学務部高等学校教育課統括指導主事
奈良本俊夫	西部学校経営支援センター支所統括学校経営支援主事
宮野聡	教職員研修センター研修部授業力向上課統括指導主事
坂本純一	教職員研修センター研修部専門教育向上課統括指導主事
難波浩明	北区教育委員会統括指導主事
岩崎紀美子	指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事
久下尚男	指導部高等学校教育指導課指導主事
市村裕子	指導部高等学校教育指導課指導主事
長嶋浩一	学務部高等学校教育課指導主事
紺谷祥一	学務部高等学校教育課指導主事
大泉昌明	人事部試験室指導主事
中原明寿	多摩教育事務所西多摩支所指導主事
君塚佳昭	教職研修センター研修部授業向上課指導主事
清野正	北区教育委員会指導主事
木内苗津子	新宿区教育委員会指導主事
大槻亨	豊島区教育委員会指導主事
西貝裕武	足立区教育委員会指導主事
田原弘一	杉並区教育委員会指導主事
平岡栄一	荒川区教育委員会指導主事
廣瀬尊貴	調布市教育委員会指導主事
重山直毅	清瀬市教育委員会指導主事

平成19年度 顧問

氏 名	役 職
松 岡 敬 明	東京都職員研修センター研修部教育開発課長
原 田 承 彦	練 馬 区 教 育 指 導 課 長
宇 田 剛	青 梅 市 指 導 室 長
新 庄 恵 子	国 分 寺 市 指 導 室 長
石 鍋 浩	稲 城 市 教 育 部 参 事 指 導 室 長 事 務 取 扱
川 越 豊 彦	学 務 部 高 等 学 校 教 育 課 統 括 指 導 主 事
滝 澤 佳 弘	学 務 部 高 等 学 校 教 育 課 統 括 指 導 主 事
奈 良 本 俊 夫	西 部 学 校 経 営 支 援 セ ン タ ー 支 所 統 括 学 校 経 営 支 援 主 事
宮 野 聡	教 職 員 研 修 セ ン タ ー 研 修 部 授 業 力 向 上 課 統 括 指 導 主 事
坂 本 純 一	教 職 員 研 修 セ ン タ ー 研 修 部 専 門 教 育 向 上 課 統 括 指 導 主 事
難 波 浩 明	北 区 教 育 委 員 会 統 括 指 導 主 事
岩 崎 紀 美 子	指 導 部 義 務 教 育 特 別 支 援 教 育 指 導 課 指 導 主 事
久 下 尚 男	指 導 部 高 等 学 校 教 育 指 導 課 指 導 主 事
市 村 裕 子	指 導 部 高 等 学 校 教 育 指 導 課 指 導 主 事
長 嶋 浩 一	学 務 部 高 等 学 校 教 育 課 指 導 主 事
紺 谷 祥 一	学 務 部 高 等 学 校 教 育 課 指 導 主 事
大 泉 昌 明	人 事 部 試 験 室 指 導 主 事
中 原 明 寿	多 摩 教 育 事 務 所 西 多 摩 支 所 指 導 主 事
君 塚 佳 昭	教 職 研 修 セ ン タ ー 研 修 部 授 業 向 上 課 指 導 主 事
清 野 正	北 区 教 育 委 員 会 指 導 主 事
木 内 苗 津 子	新 宿 区 教 育 委 員 会 指 導 主 事
大 槻 亨	豊 島 区 教 育 委 員 会 指 導 主 事
西 貝 裕 武	足 立 区 教 育 委 員 会 指 導 主 事
田 原 弘 一	杉 並 区 教 育 委 員 会 指 導 主 事
平 岡 栄 一	荒 川 区 教 育 委 員 会 指 導 主 事
廣 瀬 尊 貴	調 布 市 教 育 委 員 会 指 導 主 事
重 山 直 毅	清 瀬 市 教 育 委 員 会 指 導 主 事

参 与

氏 名	学 校 名	職 名
佐藤 榮一	港区立 港陽中学校	校長
竹田 秋人	新宿区立 牛込第三中学校	〃
近藤 悦朗	江東区立 深川第二中学校	〃
岩崎 正道	世田谷区立 緑丘中学校	〃
中村 貴美子	世田谷区立 梅岡中学校	〃
山崎 勉	世田谷区立 東深沢中学校	〃
島本 環樹	渋谷区立 笹塚中学校	〃
斉藤 進	荒川区立 尾久八幡中学校	〃
阿字 宏康	板橋区立 西台中学校	〃
大山 明	練馬区立 田柄中学校	〃
中野 利彦	足立区立 江南中学校	〃
荒川 善則	足立区立 花保中学校	〃
本庄 文男	足立区立 谷中中学校	〃
余野 直紀	葛飾区立 高砂中学校	〃
篠原 温雄	江戸川区立 小岩第二中学校	〃
鈴木 博久	八王子市立 第二中学校	〃
小谷野 良行	八王子市立 甲ノ原中学校	〃
鈴木 茂生	八王子市立 鏈水中学校	〃
岡崎 美昭	青梅市立 新町中学校	〃
西 正広	小平市立 小平第四中学校	〃
山崎 好美	稲城市立 稲城第三中学校	〃
竹澤 正	稲城市立 稲城第四中学校	〃
浅倉 隆壽	西東京市立 田無第二中学校	〃
中島 理智	西東京市立 田無第三中学校	〃

あ と が き

教育基本法をはじめとした教育関連法規の改正の中で、注視しなければならない法律として、「教育職員免許法を一部改正する法律案」があります。いわゆる教員免許更新制の導入を意味しています。

今まで、大学で取得した教員免許は、教職に就こうが就くまいが一生保持できましたが、この法律が公布される平成21年度より、10年間の期限が設けられることになるのです。東京都教育委員会では、すでに教員に対しての10年目研修に力を入れてきた訳ですが、今後の意味合いに変化があると考えられます。

また、都をはじめ各市区教育委員会では、初任者研修ばかりでなく、新任2年次から4～5年次までの若手教員に対する、各ステージ別の研修計画に工夫を凝らし、熱心な取組を展開しています。意図的で組織的な研修制度は、保護者や地域住民からの「優秀な教師育成」へのニーズに応えるため必要なことです。

しかしながら、最も基本的でありながら効果的な人材育成の手法として、On the Job Training を無視することはできません。教師が、日々の授業の中で、特に生徒から学ぶことが多いのは、疑う余地のない事実です。指導理論や指導技術を他の教員や書籍から学んでも、自分の目の前にいる生徒に役立たないのなら、無駄になってしまいます。そこに、教育の難しさがあり、反面やり甲斐があるのだと考えます。「目の前の生徒のために、自主的に主体的に、そして地道に、研修に取り組む姿勢が生徒に響き伝わる原動力となる」ことを信じていくしかありません。

今年度の会報を皆様に送るに際して、この会報の中にも、授業改善に向けた、いくつものヒントがあることをお分かりいただけたら幸いです。それを、ぜひ、日々の学習活動で生かしていただきたいと存じます。

最後になりましたが、「第66号 都中英研会報」の発行にあたり、お忙しい中、ご執筆いただきました先生方に厚くお礼申し上げますとともに、会員の先生方の一層のご発展をお祈りいたします。

(西東京市立田無第四中学校 副校長 池田 武男)

都中英研会報 第66号

平成20年3月2日印刷
平成20年3月9日発行

発行者 東京都中学校英語教育研究会

代表者 備里川 正人

発行所 東京都中学校英語教育研究会
東京都足立区立第十四中学校
東京都足立区本西竹の塚1-8-1
TEL (03) 3899-1191

印刷所 オフィス・サンライズ(株)
東京都大田区鵜の木3-7-8
TEL (03)5741-3146